
風が紡ぐ聖杯戦争

七緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風が紡ぐ聖杯戦争

【Nコード】

N1415Z

【作者名】

七緒

【あらすじ】

里の人々に疎外されていた少女は、任務先で仲間に見放され、身体に封印されていた『化け物』を引きはがされた反動で死んだ……はずだったのに、気が付くと全く見知らぬ世界で1人の少年の双子の姉になっていたのだ……

Prolog(前書き)

新連載です。よろしくお願ひします！

Prolog

「……………!」

もう…悲鳴を發する氣力すらなかった。

身体が内から引き裂かれるような強烈な痛みが全身を駆け巡っている。

いやだ……またあんなところにいるよ!!

本当に忍になるつもりなの?あんなガキが忍になったら…

お前なんて里の汚点だつてんだよ!!

…この期に及んで…走馬灯として脳裏に浮かぶこといったらそんなことばかりだった。

物心ついたときからこんな感じだった。

先代の里長と愛人との間に生まれたのが私らしい。

……だが、その愛人の一族が里に反旗を翻し……肅清された。
その時に私も殺されるはずだった……が、愛する人の最後の願い『
この子だけは生きさせてあげて』……を聞き入れるために……里に『
居場所』を作るために……先代の里長は私に『七尾』という化け物
を封印した。

お蔭で里には残ることが出来たけど……この有様だ。

里のはずれに一人で住み……少し外に出ると石を投げられ……冷たい見
下した目で私を見てくる。

それが嫌で……見返してやりたくて……来る日も来る日も修行して……
滝隠れ忍になった。

しかも見習い忍者である下忍じゃない。れっきとした一人前の忍者
である中忍だ！それなのに……

里の人たちからの態度は変わらず……というか更にひどくなってい
った。

ここんとこ続いている不況のせいだろうか？

不満のはけ口が全て自分に向いていた。

来る日も来る日も……石を投げられ……腐った卵を投げられ……パン1
つ買うのに任務で得た金の3分の1を使わされ……

任務で一緒になった忍も、『嫌な奴と一緒にになった』という目で見
てきて……危険なところは私にすべて任せて……

そうそう……確かこんな目に合っているのも、一緒に任務していた忍のせいだ。

探索任務で『川の国』を移動中に、黒い衣に赤い雲模様の外套を羽織った男に私達……三人一組のスリーマーセルは襲われたのだ。

最初は三人で応戦していたのだが、圧倒的な力の差と……奴が『私』を狙っているということを知った途端、他の2人は私を狙ってきた。

……まさか仲間……じゃないな……『任務』仲間から裏切られるとは思っていなかった私は、あつという間に動けなくなった。

外套の男が私を連れ去る時に……一瞬……『任務』仲間の顔が笑っていたのを見た。

そして……奴らは私が見ているのに気が付くと、笑いながらこう言ったのだ。

これで厄介払いが出来たぜ！！

お前みたいなの『化け物』が俺たちと同じ『滝隠れ』の額当てをしているのを見るたびに吐き気がしたけど……もうその心配はねえな！！

……って……

……私……何のために生きてたんだろう……？

『認められたい』っていう一心で…その一心で…修行してきたのに

……

皆が心の底から笑い合う輪に…入りたかったただけなのに……

薄れゆく意識の中……急速に浮いていた身体が、支えを失って地面に急降下していくのを感じた。

ドサツ!!

身体が地面にたたきつけられたとき……すでに滝隠れの中忍……であり『七尾』の人柱力…『フウ』の魂は身体に宿っていなかった。

Prolog(後書き)

えつと……主人公は滝隠れの里の忍……であり『七尾』を封印されていた人柱力の『フウ』です。次回からFateの世界が始まります。感想をくださると嬉しいです！

1話 手に入れた平穩

私は今…ぽかぽか暖かい空間でまどろんでいた。
もうここから動きたくない…そう…このままずっとここで……

「ほら、起きなよ。」

早くしないと学校に遅刻しちゃうって。」

……うう……なんか物凄く揺すられている……

「やだ……もう少し…あと1分……」

「もうとつくにそのセリフ聞いてから5分経ってるよ。
頼むよ風香ねえ。このままだと俺まで遅刻しちゃうって。」

「はいはい……って……」

もそもそと私は起き上がった。

……自分を布団の上から揺すっていたのは7歳くらいの赤毛の少年
……
私が目覚めたのを見るとホツとしたのもつかの間、また怒った顔にな
った。

「さっさと着替えないと遅れちゃうよ、風香ねえ!」

そういつと少年が部屋から出て行った……。

……誰だ？あの子……？なんかやけに馴れ馴れしかったが……

「……っつー！頭痛い……」

頭に出来ていた大きなこぶを私はさすった。
それから枕元に落ちていた分厚い本を拾った。

「あ………きつと寝てる間にコレが棚から落ちて……私の頭に攻撃してきたのか……」

………
「………だからか………」

私は深いため息をついた。

恐らく寝ている間に落ちてきたこの本が頭を攻撃した衝撃で、『前世』の記憶が蘇ったのだろう。

まったく……前世の私はろくな人生歩んでなかったみたいだ。
思い出さない方が良かった……世の中の汚い面を知ってしまった気がする……あ……でも、自分の身に宿る『変な力』の正体が前世の影響によるものだということが分かったからいいか……

ちなみに今の私の名前は『風香』

七歳で性別は前世と同じで女

頭の良さは平均……より少し下のごくごく普通の女の子……

ではないな……皆には黙ってるけど、変な力使えるし……

変な力というのは『チャクラ』という『術を発動させるのに必要なエネルギーの源』のようなものと『風を自由自在に操る力』だ。

私の前世は『滝隠れの里』という所に住んでいた正規の忍者『フウ』

享年は……たしか16・7歳。

……ちなみに死因は、腐れ親父が私の体に封印した『七尾』というカブトムシみたいな『化け物』を引きはがした反動による衰弱死。

……この『化け物』が封印されてなかったら、私の前世も少しはマシだったかもしれないな。

七尾が私にくれたことと言ったら……『風を自由自在に操る能力』くらいだもん。

それと引き換えに里の奴らから『疫病神』みたいに扱われて……

しかも、この力が今生の私にも引き継がれているのも気に入らない。この力を隠すのが、どれだけ大変だったか……

初めてこの力に気が付いたのは物心ついてから少ししてから。

気が付いたとき、私自身……自分が化け物』に見えて気持ち悪かつ

た。

だから、誰にも言っていないし、これからも知られたくない…

みんなから『化け物』扱いされたくない……

前世の記憶がよみがえった今ならなおさらだ。あんな目で見られるのはこりこりだ。

ボタンー！！

急に部屋のドアが思いっきり開いた。

見てみると、さっきの少年が怒りで顔を真っ赤にしながら立っていた。

「本当に遅れちゃうよ、風香ねえ！！もう『今日のわこ』の時間を過ぎてるんだから！」

「へいへい。分かってるって。」

「はあ……本当に早く来てよな！」

少年はそう言うとりビングに去っていった。

私もすでに着替えを終えていたので後を追う。

……少年は私の双子の弟……『士郎』。

『今』の私と同じ赤毛の持ち主だ。

あ……でも、目の色が違うな……

私は前世と同じ、オレンジっぽい色の目だけど、土郎の奴は金色っぽい色してる。

日本人か？と疑いたくなるけど私も土郎も日本人の両親から生まれた生粋の日本人だ。

…ちなみに母親と父親は、すでに仕事に出てしまっている。だからリビングには土郎しかない。

「ふあゝ…つたく…私なんて置いて先いけばよかったのに…」

そう言いながらパンを食べ始めた。

本当はマーガリンとか蜂蜜をつけたいが…時間がもう7時50分…あまり余裕がない時間だ。

土郎がむすつとした顔をして私の前に座った。

「母さんが『物騒だから一緒に登校しなさい』って言ってたじゃん。」

「あゝ…そういやそうか…」

最近、私達が住んでいる冬木市では殺人事件がやけに多い。

親が心配してくれるのも当然かもな…

でも…心配してくれる親がいてよかった…って思う。私には…前世の私にはそんな人いなかったから…

「なにニヤついてんだよ？」

どうやら、顔に出ていたらしい……なんか恥ずかしい……
私はゴホンつと咳払いをして立ち上がった。

「…別に何でもないって。ほら、歯磨きしたら行くから待ってて。」

「え…早っ！！もう食べ終わったの？」

「『忍たるもの、食事は敏速に』だからな。」

「……いつの間に風香は忍者になったんだよ……」

呆れた感じでつぶやく土郎……それに私は答えなかった。

ただ……今、ここで平穏な毎日を暮せることが……前世の記憶がよ
みがえった今…無性につれしくてたまらなかった。

1話 手に入れた平穩（後書き）

この頃は第四次聖杯戦争が始まる数日前くらいです。

『フウ』は『風香』として、『後の（衛宮士郎）の双子の姉として
転生しました。

それにしても……士郎の『衛宮』の前の名字ってなんだっただら
う？

2話 親には内緒で…

…PM5時…

そこは女の戦場になっていたと言っているだろうか。
緊迫した雰囲気立ち込めていた。

両者はにらみ合い…火花を散らしていた。

「たああああ!!!」

「負けるかアああ!!!」

ボタン

「……風香く?もう4時だし、帰る支度してもらいなさい。」

部屋のドアを開けて、家に入ってきた母親が、絶頂にあつた2人に水を差した。

「え…もうそんな時間?」

「隙あり!!!」

母親の言葉に反応して、ちらつと私が時計を見た。その隙について、優実**は**必殺技を繰り出してきた。

「え……ちょー！！なんかHPが1に……！！死守しないと！！」

「隙を見せるのが悪いのよ。」

「とうるか死守できるものならしてみなさい！！」

「ああああ！！私の女魔術師が……！！！」
メイガス

鼻で笑う優実……私は口を膨らませた。

クソ……片目で時計を確認しておけばよかった……せめて片目でも画面を向いていたら、避けられたかもしれなかったのに……悔しい思いが胸にたまった。

私は数少ない友人の1人……花里 優実と一緒に対戦ゲームに熱を上げていた。

前世は皆無だったが……今は友達と言える存在が何人かいる。

とはいっても……あまり友達つきあいが上手くないせいで、あまりいないのだが……

「6勝5敗……まあまあの結果ね……」

「……はあ……負けた……」

あゝ……！あと一戦やってたら逆転の可能性があったのに……！！」

「仕方ないよ。なんか最近怖い事件が多いし……早く帰らないといけないからね。」

優実が残念そうに言った。

本当に最近『殺し』が多い……

別に死体は（前世で）見慣れているし、自分自身も（前世で）殺しをしたことあるし……

そこまで『殺し』というキーワードに恐怖心はわいてこない。

っというか、元・忍者である私にかなう殺人鬼がいるとは思えない。だから私は別に最近起こっている事件について気にしてなかった。

が、そうではない母親は何かと気にしていた。

『登下校は出来る限り士郎と一緒にすること』『友達と遊ぶのは4時まで』『鍵は必ず閉めること』『知らない人が来ても開けないこと』『……などなど……』

分かり切ったことを何度も繰り返して言うてくる。

士郎はうんざりしてたし、私自身うんざりするが……

でも、今はそれさえも『幸せ』だと感じてしまう自分がある。

だって……それは気にかけてくれている証拠だから……

前世の私には、その言葉をかけてくれる人はいなかったから……

……いや……一応いたな……

だがそれは、『私を心配して』駆けてくれた言葉ではなく……
『アレしちやいけな』 『ココには入ってはいけな』 『任務がな
い日の夜間行動はいけな』といった感じで『皆が嫌がるからやる
な!』といったたぐいのものだった。

「あ…そうだ!!」

お母さん!明日さあ、学校休みだからデパートに行つていい?」

夕食を食べ終え皿を下げながら母親に尋ねると、驚いた顔をされた。

「なんでさ?」

案の定、まだ肉じゃがを食べていた土郎が不思議そうにこつちを見
てきた。

『風香ねえがなんでデパートに？服装なんて興味ないはずなのに…』
って思ったんだらうな……

「優実ちゃんと約束してるんだ。
一緒にデパートの屋上でやる『ファンタズムーン』のショーを見に
行くんだ!！」

「…意外だな……風香ねえって美少女ヒーローものって見てたっけ
?」

「(無視) ねえねえ!!!
お母さん~~~~いいでしょ~~~~?」

「そう……まあ……優実ちゃんと一緒だったら平気かしら……
まあ……門限は守るのよ。」

よっしやー!!!

母親からのOKでたー!!!

……いや……事実は曲げてるけど、嘘ばかりじゃないよ……

元々……優実を誘おうとは思ってたし……(用事があるみたいで断ら
れたけど……)

デパートの屋上でショーがあるのは事実だし……

でも……一番の目的は……

デパートで、1ヶ月に一度先着限定発売されるという『季節限定・特製柚子味バームクーヘン』を買いに行くためだ!!!

この日のために、コツコツお小遣いをため……欲しいゲームも我慢し……本も我慢したのだ!!!

絶対に手に入れてやる!!!

待ってるよ!!!バームクーヘン!!!

「……風香ねえ……絶対になんか別の用事が……」

「土郎?何か言った?」

「な……何も言っていないよ!!!ごちそうさま!!!」

……うん……物凄い笑顔を向けたら黙っててくれた。
さすが私の弟よ……

お土産で何か買ってきてあげようかな

その日は明日のことを夢見て幸せな気持ちで眠りについた……

2話 親には内緒で…（後書き）

前世で甘いモノをほとんど食べられなかった反動で、風香は甘いモノが大好き設定です。

花里優実はおリキャラです。風香と士郎の幼馴染で近所に住んでいるという設定です。

次回から原作（Zero）に少しかかわっていく予定です。

3話 白い貴婦人と漆黒の執事

「……くそ……」

まさかこのタイミングで目覚まし時計が壊れるとは思ってもいなか
った……

私は全力で走り続けていた。

こんな時にチャクラを使うことが出来たら……楽なんだけど、昼間
っから使う気にはならない。

昨夜こっそり家を抜け出してチャクラを練ってみたのだが……本当
にチャクラって凄いい！！

前世の時は物心ついたときから使ってたから何にも感慨がなかった
けどさ、こうして改めて……転生してから初めて使ってみると、世
界が別世界に見えるてくる。

眼下を走る車よりも早く……普通に走るより身体も軽やかに動いて
くれていた。

いや〜〜気持ちいい……風と一体になった気分だ！！

なんか記憶の中にある他の術も使ってみたくなってきた。

きつと……それらも改めて使ってみると、以前とは別物のように感じ
ることができるのだろう。

……ただ……同時に心の中に冷たいモノが走ったのは事実だ。

…この力ってバレた瞬間に人生転落街道真っ逆さまだよな…

前世の時みたいだに『化け物！』っと言われ…いや…それだけじゃないな…

どこか病院みたいなところに連れていかれて、毎日…研究されるだろうな…

なんとというか…『新種の動物』とか『宇宙人』のノリで扱われそうだ。

となったら今までの平穏な生活は崩れてしまう…

私だけじゃない…母親や父親…それに士郎だって、今までと同じ生活を送ることができないだろう。

…でも待てよ…？

もしかしたら…私を研究者に差し出した報酬で、今より何十倍もいい生活を送ってたりして…

…考えない様にしよう…

今はとにかく『バームクーヘン』だ！！！！

待ってるよ！バームクーヘン！！！！絶対手に入れてやるからな！！！！

私は力を振り絞ってラストスパートに入った。

「みんなあゝゝ！！大きな声でファンタズムーンを応援して！！
せゝゝの、頑張れ！！！！」

「『がんばれ！！！！』」「『』」

「『……………』」

なんでこうなってるんだ？

何でもともと見る予定もなかった美少女バトルモノのショーを見る
羽目になってるんだ？

うん…分かってるよ…………理由くらい分かってるさ…………

そもそも、私がバームクーヘンを買うのに、タッチの差で合わな
かったのが原因だ。

…そして今…隣にいる女性…最後のをタツチの差で買った女性が…
気の毒に思ったのか『タダで』譲ってくれたのだ!!

で、まあ…確かに嬉しかったけど…人のモノをタダで貰ってしまったので、なんか嬉しさよりも罪悪感の方が勝ってしまい…

「なにかお礼をさせてください!!」

つて言っただよ…いや…最初は断られたんだけど、何度もお願いしたら…

「この町の観光スポットを教えて欲しい」

つて…でもさ、開発途中のこの町に、あまりめぼしい所なんてないし…

つてか、私自身…精神年齢はもっと上だが肉体年齢は7歳……ここまで新都の事に詳しいわけでない。

で、仕方ないので…ココ……デパートの屋上の仮設ステージに来たわけだ。

……チラリ……と私が連れてきた2人組を横目で見ると……

「がんばれー！ー！ー！ほらほら、セイバーも応援しなさいー！
風香ちゃんも遠慮しないでいいのよ。」

私にバームクーヘンを恵んでくれた女性……アイリスフィールさん
って人が、物凄い夢中になって応援をしている。
…オタクだったのだろうか？そうは見えないんだけどな……
きつと……こういうのが珍しいから興奮してるのかもな。

彼女は全体的に白っぽい格好をしていて、ロシアとか北方系を思わ
す帽子をかぶっていた。

ちなみに目は赤い。これは充血しているのではなく、もともと真紅
の色をしているのだそうだ。

「…アイリスフィール…私には騎士としての誇りがあります。
たとえば貴女の命令であっても……その……」

で、こっちで応援するのを躊躇っているのが、セイバーさん。

アイリスフィールさんの執事みたいな感じで、彼女と対照的な黒で
身を固めている。

……まあ…燕尾服だから黒なのは当たり前か……

ちなみに名前に分かるように、彼女も外人さんで、長い金髪に緑
色の目が特徴的だ。

「いいじゃない！

こっぴつた機会って、これからは滅多にないわよ……！

「……はあ……」

ごめん…セイバーさん……なんかため息つかせちゃって…

「楽しかったわね！！イリヤにも見せてあげたいわ。」

「イリヤ？」

「ええ…風香ちゃんと同じくらいの私の娘よ。」

その時…なんでだろうか？アイリスフィールさんは笑顔だったけど……一瞬だけ、影が差したのを見た気がした。

なんか……もう会えない人を思い返すような……懐かしさと寂しさが入り混じった……そんな顔を一瞬…無意識のうちに見せていた。

…きっと何か事情があるのだろうか、詮索はしない方がいいな…

「そうだ！風香ちゃんは何時まで大丈夫なの？」

「え……？えつと……門限は4時だから余裕をもつて3時には帰りたいです。」

「そう…それならまだ数時間あるわね…

それまで一緒に回らない？」

「アイリスフィール！！」

このような時に子供を連れて散策など……！！」

セイバーさんが怒った感じで言った……ってか怒ってるよね。

でも、そんなセイバーさんなんか素知らぬ顔のアイリスフィールさん。

「平気よ。だいたいサーヴァントの気配はないんでしょ？」
「サーヴァント？」

聞き覚えのない単語だな……なんだろうか？

「えつとね……実はSPがいるんだけど……
煩いから撒いてきちゃったのよ。」

嘘だ……この人は何か隠してる表情をしてる……

でも……ツツコまないようにした。
だってさ、ツツコまれたくないから嘘ついたんでしょ？なら聞かない方がいい。

「アイリスフィールさんって凄いね!!」

SPを撒くなんてカッコイイ!! 映画のヒロインみたい!!」

「褒めてくれてありがとう。」

「はあ……仕方ありませんね……」

貴女がこの子どもと周ることを望むのであれば、私は従いましょう。

「

一応、セイバーさんからのOKも出たみたいだ。

「行くわよ、風香ちゃんにセイバー!!」

嬉しそうに笑う彼女……。今がとっても『幸せ』って感じの笑顔だ。
…なんでかな？

前世の私が…初めて里の外に出ることを許してもらえて、初めて外
の里で買い物しているときの笑顔に似てる気がする……

気のせいかな？

もうそのことは考えない様にしよう。

で、楽しい時間ってあっという間に過ぎるモノで……もう3時だから、彼女たちとは別れて、帰路に着こうとしたのだが……

「!?!」

そのとき、何かが私の近くを通り過ぎた感じがした。

姿は見えないけど……好戦的な何か……

私はそっと目を閉じた。

…もう『七尾』は封印されてないけど、七尾の力は使えた。

その中の一つ……封印されていた時よりも能力も格段に落ちるが…

…『探査』を本格的に使うためのチャクラを練り上げる。

…これは周囲の『異能の力』を確認するための能力だ。

…っていつても……前世の記憶を思い出すまで知らなかった力だし、
思い出しても使うなんて思ってもいなかった。

一応…常時発動している能力…なのだが、『異能の力』なんて、そ
んなほいほいあるモノではないし、だいたい七尾が封印されてない
今は、この能力自体がかなり落ちているので、『相手が隠そうとし
ている場合』だと反応しないのだ。

だが……これに引っかけたということ……
その力を、私の横を通った何かは隠そうとしていない……ということ
だ。

…目をつむっていると……目を開けていた時よりもずっと多くの情
報が脳内に入ってくる。

……人が行き来する雑踏……その中で一際目立つ好戦的な存在の姿が

見えた。

なんか……黒髪の青年で槍を持つてる……この時代に槍？ってか……

もう一度目を開けて、その位置を見るが……そんな青年はどこにもいない……

ただ……まだ発動したままの『探査』が、『そこに青年がいる』という情報が脳内に送られ続けていた。

……忍者……かな？私と同じような……

私は路地に入ると印を結んだ。

「影分身の術！」

ポワんっという煙と共に、少しも違いがない私が現れた。

「さっきの男を、気が付かれないように追ってくれる？」

「了解。」

影分身の私はニッと笑うと、すぐに雑踏の中に紛れてしまった。

「……なんなんだろうな……」

まあ……槍男ことは影分身あれにまかせるとして、私は帰るとしますか。

……蜜色に染まりつつあるこの町で……これから繰り広げられる戦いに片足を踏み入れかけていることに、この時はまだ気が付かなかった……。

4話 倉庫街の死闘（前書き）

今回はちょっと長めです。

4話 倉庫街の死闘

「……………なんなんだよ……………あれ……………」

私はボソ…^{ぶんしん}つつぶやいたが、幸いここは風下なので、今の声は、
どんちゃん騒ぎをしてる奴らには届いてないだろう。

……………先程私の追っていた透明な男は、港の倉庫街に着くと実体化した。
やはり意図的にすがたを隠していたようだ。

……………たしか……………前世では『岩隠れの里』に透明になれる忍者がいた
と聞いたことがあったが……………
その亜種系統の術だろうか？
だがわからない……………忍びが槍を主体の武器として使うのだろうか？

……………そうこう考えているうちに、現れたのは、昼間一緒に行動した
……………緊張して張りつめた顔をしているアイリスフィールさんとセイバ
ーさん……………

3人は、『サーヴァント』とか『聖杯』とか言い合っていたが……………

そんな専門用語が私にわかるわけもない。

……アイリスフィールさんは人間っぽいけど、セイバーさんと槍使い…ランサーとか名乗ってた人は、なんか人間じゃない…力を持っている事は明らかだ。

とはいっても、私と同じ忍者ではないみたいだが……

そして、セイバーさんが青いドレスの鎧を身にまとったとたん、戦いの火ぶたがきって落とされたのだ。

それは…幾たびの戦いをくりぬけてきた私でさえ……目を奪われる戦いだっただ。

前世も含め……今までに見たことのない戦いだっただ。

不可視の剣と2本の槍が交差しあつさまは、まるで互いに舞いを踊っているようにも見える。それくらい美しく輝くような戦い……だが、それは見世物ではなく死闘……なのに……なんか二人とも満足した感じの表情を浮かべている。

死闘なのに狂乱の戦いではなく……互いに尊重しあい…認め合った上での一騎打ち……

だからこんなにも美しく輝いていて、引き付けられる戦いになるのだろうか？

少なくとも…前世で経験してきた戦いとは違った。

私の戦いは忍者の戦い…… 尊重なんて考えたこともない。

だって…… 忍者は道具だから……

『戯合いはそこまでだ、ランサー』

突然、オッサンの声が頭に響いた。

誰だ？他にもいるのか？

そう思い周囲を見渡すが…… 視界に入ったのは、コンテナの陰に隠れる小柄な女と…… クレーンの上に乗っている怪しさ満点の仮面男……

…… アイツらの声じゃない…… よな？

仕方ない…… 少しでもチャクラの消費を抑えるために目をつむり『探査』を始める。

すると…… ポールの上に金ぴか鎧の傲慢そうな男が一人…… そしてコ

ンテナの上にナルシストそうな男が一人…たぶんこいつの声なんだろうなって思う……
んで、驚くのはこれからだ。

この2人は姿を消していたから分からなかったのは当然だと思う。
でも…気が付かなかった……もう1人…銃を構えた男がコンテナの陰にいたことに……
術なしで…忍者でもなさそうなのに、ココまで姿を隠せるなんて…
…ちよつと感心してしまった。

少し何するのかな…って見てたけど、銃を構えたまま動かないので…仕方なく『探査』を解き、戦場に目を戻す。

いつの間にか赤い槍一本で戦っているランサーと鎧を脱ぎ捨てたセイバーさん。

……身を軽くした…ってことかな？よく分からないけど……
にしても……危ないことをするな……って思った。

ココからだから分かるのかもしれないが……ランサーの足元には使っていない方の槍が転がっている。

ランサーを攻撃するには彼に接近しなければならぬ。
が、その時に……その隙をついてあの槍で攻撃されたら……

鎧を纏っていないから…防ぐものがない。

案の定、予期していたことが起こった。

わずかに足の運びが鈍り、隙を見せたランサーに弾丸のように攻め入るセイバー。

が、ランサーが転がっていた槍を蹴り上げ…その槍についていた呪符のようなものはがれ…黄色の短槍が剣を振り上げ鎧も纏っていないセイバーの喉元に刃を向けた…！！

が……セイバーさんの腕も大したものだ。

紙一重でそれを交わし…左手を怪我したみたいに見えるが…それでも致命傷は免れたようだ。

しかもその上で、ランサーの腕にもちゃっかり傷を作っていた。

……2人とも傷は浅い…が、ランサーの傷が何故か高速で…ビデオの巻き戻しをするみたいに治癒されていく……

セイバーさんは苦い顔を見るとアイリスフィールさんに向かって叫んだ。

「アイリスフィール！私にも治療を！！」
「もうやっっているわ！！」

見ると、アイリスフィールさんがセイバーさんに向かって両腕を前に出していた。

…いいな…遠距離からの治療能力か…
前世の世界では近づかないと出来なかったから…前世の世界の医療忍者たちが見たら、羨ましがるだろうな…

つて…そんなことはどうでもいい！！

どうやら…あの黄色の槍は『消して癒さない傷』を作るらしい…
厄介だな…ホントに…

なんかそれで正体がセイバーさん達にばれたみたいだけど、私は知らない人の名前だった。

『ケルト神話』とか言っていたけど…神話って物語だろ？読んだことないけど…

その時！！突然、雷鳴が響き渡った。

こんな天気がいいのに！！？って思ってた上を見上げると……

…なんかデツかい牛にひかれた戦車が下りてきた。

豪快そうなオツサンと……従者…なのかな？って感じの気弱な少年を乗せていた。

どうやら……新たな敵が登場したわけ…みたいだな……

私は気を引き締め直した。

…張りつめた静寂が訪れた時……豪快なオツサンの声が響きわたった。

「双方武器を収める。王の御前である！

我が名は征服王イスカンドル。このたびはライダーのクラスを得て現界した。」

……静寂……

…皆ポカン…っとしている…

ってかさ…なんであいつ…急に名乗ったんだ？それよりも…声でかいよ……近所迷惑。あ…でもここは倉庫街だから人いないか……

っというよりいたら、さっきまでの戦いを聞きつけて誰か来るよな？

さて……どうやら……彼はセイバーさんとランサーを仲間に加えた
かったみたいだな……

結果……それは相手を逆上させるだけになったみたいだな……
聞いてなかったから分からないが、おそらく利益が一致しなかった
のだろう。

「だからやめとけって言っただろ！」

気弱そうな少年が抗議の声を上げる……もしかして……あっちが主人
でライダーってのが従者なのか？
可哀そうに……あの少年……いろんな意味で前途多難って感じだな……

でも……あの豪快な人の従者みたいな立ち位置にいられるってことは、
才能っていうのはあるのかもな。
だって……いくら豪快な人でも才能ないと従者にはしないよ。
聞く限り正論を述べているしな……

『そうか、よりもよって貴様か』

ランサーの主人の声がまたも響き渡る……

その声を聴いたとき……気弱な少年も震えていたが……私の背中にも寒いモノが走った。

だって……その声色は……こっちに来てからあまり聞かなかった声色……
……
一方的に人を見下す声だった……

なっさけねえな!!

化け物なのにドベだなんて……

お前なんて足手まといなんだよ!!

声が……声が蘇る……

そう……私には才能がない……その上『化け物』持ちだ。
だから……見返してやるためにたくさん修行した。でも……奴らは……私が奴らより強くなっても……認めてくれなかった。

だって……『化け物』だから……
私の実力で『七尾』の力は借りてないのに……それを『化け物の力を借りてるから強い』お前自身は弱い』って決めつけやがって……見下しやがって……!!!

『魔術師どつしが殺しあうというとう本当の意味……その恐怖と

苦痛とを、余すところなく教えてあげるよ、光栄に思いたまえ。』

何が『光栄に思いたまえ』だ!!

偉そうにしてさ!! そんな陰でコソコソ隠れてるエリートさんに『殺し合い』が教えられるかってんだ!!

見るからにアンタ…『本当の殺し合い』したことないだろ!! 私の方がまだそっちの経験値が高いと思うぞ?

あ~~~~なんかイラツとしてきた!! アイツ…ぶん殴りたい!!!! あのナルシスト顔を変形させてあげたい!!!!

「…ここに集うがいい!!」

なおも顔を見せないような臆病者は、征服王イスカンドルの侮蔑を免れぬものと知れ!!」

前半の方は聞きそびれたが…戦場に大気を震わす豪快な声が響き渡った。

それを聞いたとき……私の口元が歪んだ気がした。

……思い立ったら吉日!!

他の人たちに気取られないように……気配を立てて移動する。

戦場の舞台に立っているセイバーさん達は、そっちに夢中で気づかれないと思うから……

注意すべきはクレーンの上の仮面と……小柄な女……

仮装大賞もびつくり！！ってかんじの金色の鎧を纏った人は姿を現したみたいだから……ほおっておいて……

一番気を付けないといけないのは……銃を構えた男……だな。

だが……戦場に『戦いの』騒がしさが戻った今、そっちの方に神経が言っているはずだ。

一旦戦場を離れ、コンテナの裏を周りながら……

……結構楽に目的地に着いたとき……改めて戦場を見下ろすと……結構様変わりしてた。

いつの間にか黄金の鎧の人はいなくなっていて……代わりに真っ黒い鎧に同色のオーラを放った人が、セイバーさんを斬りかかっている。

セイバーさんは元々怪我してるからな……しかも治らないみたいだし……

さて…どのタイミングで実行するか……

…って悩んでいると…ランサーがセイバーを助けに入ったのが見え
た。

セイバーさんは感動したみたいな顔をしている。

どうやら…ランサーは自分とセイバーが戦っていたのに横槍を入
れるな！…みたいなことを言っていた。

…こういう戦いって…初めて見たかも…
戦いにも『尊重』ってあるんだ……なんか感心するな…

『何をしている、ランサー？』

どうやら彼の主は、その行動が理解できなかったみたいだな。

なんというか…『セイバーさんを護るな！…ってかセイバーさんをさ
つさと殺せよ！…』って感じの口調だ。

それに反論するランサー。

いや〜…反論するときも口調が丁寧だな……凄くなって素直に思
った。

「この私とセイバーとの決着だけは尋常に…！」

『ならぬ。ランサー、バーサーカーを援護してセイバーを……ぐわ

あああ！！」

言葉を言い終える前に、彼はコンテナから落ちて行った。

え？なんで落ちて行ったかって？それはもちろん……

私が蹴とばしたからに決まってるでしょ！？

「まったく……そういう態度は嫌われるぞ……バカ。」

……あゝスッキリした！！！

……でも……

周囲の視線が痛いのは気のせいかな？

5話 戦場を困惑させる猫

「……………なんなんだ……………あの女の子は……………」

僕……………衛宮切嗣は、突然現れてランサーのマスター……………時計塔の一級講師であるケイネス・アーチボルトを蹴り飛ばしてコンテナから落とした女の子を少しにらんだ。

歳は8歳の1人娘……………イリヤと同じくらいか彼女より下だろう……………か？赤髪でショートカット……………服装も深緑のコートにジーンズといったシンプルな感じで……………全体的にボーイッシュな雰囲気醸し出している少女だ。

一体彼女は何者なのだろうか？いくらセイバーに気を取られていたからとはいえ周囲の状況は把握していたつもりだ。なんであの少女に気が付かなかったのだろうか……………

まさか……………あれはアサシンの本体か？アサシンなら『気配遮断スキル』あるから気が付かなかったことにも説明がつくが……………いや……………それはないな。アサシンだったらあんなに派手な真似はしないだろう。

なら姿を隠しているバーサーカーの主か？^{マスター}

いや……………それなら多少なりとも魔力を感じるはずだ。それなのに……………彼女からは魔力が感じられない。だが、それなのに……………ランサーの『魅了』^{チャーム}にかかっている様子はないし……………

そもそも…なんで姿を隠しているケイネスの位置が分かったの
うか？彼の位置を見破るためにはハイテク機械に頼らなければ
ないのに……彼女がそのようなものを持っているようには見え
ない……

一体何者なのだろうか？しばらく様子見と行くか……

「主!!」

セイバーさんと漆黒の武人の間に立っていたランサーは、コンテナ
からバンジージャンプ中の主マスターを助けるため一気に跳躍し……彼が地
面に激突する直前で助け出していた。

「き……貴様……！……いつたい何者だ……！」

無事にランサーに救出されたケイネスがギツッと私をにらんで言った。

「おいおい……部下に助けてもらったのに礼もしないの？」

「私の質問に答えたまえ。」

「……ま……まさか………風香ちゃん……？」

……アイリスフィールさんが驚いてる。そりゃそうだろうな……なんのことはないフツの子供で家にとくに帰ったのだと思ってた子が、姿を隠しているはずのオツサンを蹴り飛ばしたのだから……。

……ん？……までよ………これって不味くないか？

思わず感情のままに動いてしまったけど………こんな戦い………確実に「一般人」は見てはいけない戦いだろ？夜中に人気のない倉庫街で殺し合いしてるなんて常識じゃ考えられない。……このままだと「目撃者は全員殺す」………みたいな感じになるんじゃないか？

いや………私は殺しても影分身だから意味ないけど………今後の生活に支障有りすぎだろ………！！

……私自身は何とかなるかもしれないけど、何も知らないし能力もな

い両親や土郎が危なすぎだろ!!

…… ったく…… 仕方ない…… なんとかしてごまかさないと……

「……フフフ…… 昼間はありがとう…… アイリスフィールよ。」

めんどくさいけど、速攻でキャラ作るぞ!! くそ……… なんでアイツ蹴ったんだよ、私!! いや…… ムカついたけどさ押さえないとダメだろ…… やるとしても穏便にやらないと……… これはあれかな? 『肉体年齢に引きずられる!』 って感じの奴かな?

「…… 適当に町をふらついていた女の子の姿をコピーしたのだが……… 結構便利だな、幼女の姿というものは。」

「では…… その姿は本来の姿ではない……… ということか?」

うわ…… 怖いな……… ランサーの奴がめっちゃくつちゃ睨んできてるよ

………
まあ当然か……… 自分の主が蹴られたんだからな………

「まあな。ちなみに『風香』って名前も偽名……… だな。

で……… 私が何者かって? オッサン……… アンタが先に名乗りなよ。女性に先に名乗らせるのか?」

「オッサン……… だと!? 何を言うか、私はまだそこまで年を取ってない。
い。」

ウェイバー君……… 何を笑っているのかね?」

ビシツとウエイバー……つまりライダーの従者に見える主の少年に向かつて冷え切った視線を向けた。

あ……本当だ……笑いをこらえている……でも、いきなり怒鳴られてビクッて来たみたいだな。ぴたって笑いが止まったぞ。

……で、それを見て少し満足したらしいオッサンは視線を私に戻した。

「もう一度問う……お前は何者だ？」

「……フフフ……いいだろう……教えてあげようか……」

子供の姿に身を隠し……えっと……十数年……風の日も……雨の日も……雪の日も……晴天の日も……曇りの日も……アニメの再放送が待ちきれない日も……」

「……いいから早く言いやがれ……！」「……」

うち……うるさいな……皆で声をそろえなくても、分かっているよ！でもさ……思いつかなくて困ってんだよ！！少しでも考えさせる時間をくれたっていいだろ！？……でもそんなこと言えないし……仕方がない……このキャラで行くか……」

「まあ焦るでない……とにかく私の正体は……！！！！」

『変化の術』の印を結ぶ私。そろそろチャクラがアレになり始めてるけど……この程度の術なら何とかなる！

ボワ〜ン

つて音と白い煙……そして私が変身した姿は……

「『ネコアルク』とは私の事だ……にゃあ……!」

……シーンと静まり返っちゃったよ……

でも仕方ないだろ……思いついたのがこれしかなかったんだし……

えっと……ちなみに私は『ファンタズムーン』に登場するマスコットキャラ……『ネコアルク』に変化しています。具体的に言うと……眼が大きいのが特徴的な、50?くらいの金髪のネコです。あ……ちやんと服着てますよ。

どうせ知っている人なんていないだろ? いや……アイリスフィールさんとセイバーさんは昼間のショーで見るから知ってるか……いや……『ネコアルク』は、あのショーには登場しなかった! 時間系列的にまだ登場してないころの話ショーにしたから2人は知らないはず!!

「……………ネコ?」

「違う！『ネコアルク』だにやあ！！！」

「……なるほど…ネコだから、ランサーの『魅了』チャームに對抗できたのか……」

「『魅了』チャーム？なんだそれ？」

呆然とした感じのウェイバーって名前の少年に尋ねてみる。
すると彼は戸惑いながらも答えてくれた。

「え…っと……彼の類にホクロがあるだろ？アレを見たランサー魔術師ではない女性はみんな、虜になってしまつんだ。ただ……女魔術師メイカスと言つても対魔力がないと虜になつちやうみたい……って、なんで僕が説明しないといけないんだ！！！」

「別にいいじゃん……そっか……魔術か……」

……ふん……そんな能力があつたんだ……

奴らは『ネコだから効かない』って思つてるみたいだけど、私は人間で魔術師でもないのだから……その能力は効くはずなのに、効いていない……つとなると考えられることは1つ！

『魔術 忍術』

つてことかもな。『忍術』が使えるってこと以外は、そこら辺の7歳児と大差ないんだし……

「……何故、我が主を蹴り飛ばした？」

あ…あれ？なんかランサーの周囲の空気が変わったぞ？めっちゃくっ
つちゃビリビリしてる……

「…なんで我が主を蹴り飛ばしたのだ？」

「その子を一方的に馬鹿にしたから……だにゃあ。」

そう言っつて私はウェイバーを指差す。

「だつてさ……彼だつて努力してるのにそれを頭っから否定するの
はおかしいだろ？」

ハッキリ言っけどオッサンは確かにさあ、見た目からして頭いいと
思う。でもさ……」

「黙れ！！！」

言い終える前……つてか問題点を指摘する前にオッサンは立ち上がっ
て叫んだのだ。

つたく……人が話してるつてのに……

「ランサー！！命令だ……あの煩いネコの口をふさげ！！！」
「了解」

つと言った瞬間に地面を蹴るランサー。
あつという間に私との距離が縮まっていく。黄色の槍と赤い槍を持つてこつちにまっすぐ走ってくる。

「不味い!!」

ランサーが使おうと決めたのは、黄色い槍の方だったみたいだ。私にまっすぐに襲い掛かるうとする黄色い槍。
私はとつさにチャクラを練り上げ印を結ぶと……大きく息を吸い込み……そして……

「『水遁・水乱波』!!!!」

「!!!!」

私は口から大量の水を吹き出した。本来なら敵を押し流すくらいのも術なのだが、チャクラとの折り合い上……全力を使えなかったので『押し流す』まではいかない……少し強力な水鉄砲をかけられたみたいな感じになってしまった……が、不意打ちを食らったランサーの動きが一瞬だけ鈍くなる。

その隙について私は一度コンテナを下りて彼との距離を放そうと走り出した。

つてか……まずいな……チャクラが残りわずか……だ。『変化』を

継続させるだけで精一杯……どうにかして逃げ出さないと……

「お主……余の軍門に下ってみないか？」

「はい？」

何て言いましたか……この人？

先程大声でいきなり本名を叫んでいた人……ライダーがいつの間にか自分の横にいた。

「先程の魔術は見事であったからな。正確に言えば……魔術とは少し違うみたいだが……そこも魅力的なところだ。どうだ？この征服王と一緒に世界を手にしないか？」

「断る」

「そうとは言わずにどうだ？待遇は応相談だが……」

「くどいぞ。やらないと言ったらやらない！！」

キツパリと言い放ってやったら、ライダーは大きなため息をついた。それを見計らったように、ランサーが声を上げた。

「ライダー、話はすんだか？済んだのなら戦闘を再開するのだが……」

……

「ん？あ……すまん。

それよりも……本当にお主は余の軍門に加わらないのか？」

「くどい！！何度も言っているが、俺の主はたった1人のみ！！他の人物の下に着くなど……」

あれ……なんでだろう……さっきまでと全く同じなのに……急にランサーが……変わったような……
なんというのかな……一気に美男子に見えてきた……前世でも見たことがないくらい妖艶な美貌……
ヤバイ……顔が熱を出した時みたいに熱い!!
心臓が急にバツクンバツクンなり始めてきたし……なにこれ?こんな時に病気でもしたのだろうか?

「……………!……………かちゃん!!風香ちゃんしっかりしなさい!!!」

パシィパシィと軽く頬を叩かれたことで、ハッと我に返る私。隣を見るとアイリスフィールさんが何やら厳しい顔をしている。

「しっかりして!その感情はランサーの能力……『魅了』^{チャーム}によるものよ!

さっきまでは効いてなかったのだから気を確かに持って、風香ちゃん……!」

「……私の名はネコアルクなのだが……って……ええ!!私、『魅了』にかかったの!？」

黙ってうなづくアイリスフィールさん……なんてこった……さっきまではなんとも思わなかったのに……やっぱりチャクラの消費が原因だろうか?

ただでさえ半分のチャクラしかないのに『探查』『変化』『水乱波』
…3つも術を使ったのだ。もうすぐチャクラは底を尽きようとして
いた。

手を見ると…幸いなことにまだネコアルクのまん丸い手のままだ。
変化は解けていない…ならまだ何とかなるかもしれない!!
そう思った矢先だった。

「……………aa……………arr……………er……………!!!」

……………こいつの存在すっかり忘れてた!!!

放置プレイに耐えきれなかったのだろう……倉庫街に響き渡るくら
い大きな奇声を叫ぶと、鉄パイプを握りしめてセイバーさんに向か
って走り出したのだ!

セイバーさんは目の前で起こっていた私に気を取られていたので、
慌てて右手で剣を持ち直して迎え撃とうと構えた。

……左腕を封じられ全力を出せないセイバーさんは、非常に不利だ。

「セイバーさん!!!」

気が付くと、加勢をしようとして残り少ないチャクラを足に集め、地面
を蹴る私が出た。

そのまま一瞬で迎え撃とうとするセイバーさんと、鉄パイプを振り
上げる武人の間に割り込んで……そして……

案の定、鉄パイプで吹っ飛ばされて…高速で宙を旅させられていた。
そのままコンテナに凄い勢いのまま激突し……

ボワン

つと間の抜けた音を立てて…私は消滅した……

「……………っ！…!?」

私はガバリつと起き上がった。
脳内に洪水のように急に流れ込んできた大量の経験……おそらくは…影分身が消滅したのだろう……

「風香ねえ？」

横を向くとトイレに起きていたらしい士郎が、眠たげな眼をしながらも……心配そうにこちらを見てきた。
汗だくだったが…私はにっこり笑うと立ち上がる。

「平気。ちょっと怖い夢見ただけだから……ちょっと台所で水飲んでくる。」

おやすみ、士郎

「うん…おやすみ風香ねえ。……ふああ……」

あくびをすると士郎は布団に戻っていった。

私はまっすぐに台所に向かい…ミネラルウォーターをそのままゴクンゴクンつと半分くらい飲んでしまった。ミネラルウォーターは喉だけでなく…身体に染みわたっていく気がした。

…色々と情報がありすぎて頭がパンクしそうだった。

いつも飯を食べる椅子に、ふらつくように寄りかかり脳内の情報を整理する。

おそらく……運が良かったら、『ネコアルク』は死んだと思われた
だろう……。

あの影分身が消えるときの間抜けな音は、コンテナに激突した時に
発生した巨大な音にかき消されたと思うからだ。

だが……油断はできない……あのオツサンやウェイバーという少年
あたりなら騙せるだろうが……他のメンバーは分からないし、なに
より用心しないといけないのは……コンテナの陰に隠れていた中年
の男だ。

きつと……『私』^{ネコアルク}が生きていることに気が付くと思う……

「……つたく……面倒なことに巻き込まれたな……」

はあ……つと深いため息をついたとき……消防車のサイレンが深夜
の町に響き渡った。

……なんだろうか？つと思いい雨戸をあけてみると……

丁度……火災の影響で赤く染まる階が見えるホテルは……巨大な爆音
を響かせ電気が全て切れ夜の闇に溶け込んだかと思うと、一気に粉
々に崩れ落ちたのだった……。

6話 決別

頬杖をついて黒板を眺めていたが、何にも頭に入っていない。
私の脳内の大半は、深夜の出来事が絞めていた。

本来ならば学校に来るのは得策ではない……まだ自分の生存を疑っている奴がいるかもしれないからだ。

でも……休むのはいけない……このタイミングで休んだら……もし……このクラス内に倉庫街にいた人間の関係者がいた場合……疑いが強まるからだ。

……一応……『変化の術』で『私は風香ではない』とアピールはしたが……成り代わりを疑われているかもしれない。ランサーの主人であるオツサンやウェイバーっていう気弱な少年……たぶんアイリスフィールさんは疑ってないと思うが……たぶん……あのコンテナの陰に隠れていた男は疑っていると思う。

クレーンの上にはいた仮面野郎は除くと……彼が一番……前世の私が接してきた忍者に近い気がした。しかも……死線を潜り抜けてきた歴戦の暗殺部隊の上忍の気配がしたのだ。

感情を押し殺して……殺人のための道具として動いている……直感だからアテにならないかもしれないが、そんな感じがした。

だから……もし忍者的発想で考えると……きっと街中で『私』を見かけたら、念を入れて殺してくるかもしれない……後難は取り除いておかないと目的に達成できない可能性が出てくるからだ。

そう考えると身体の底からブルって震える。

それでも、たぶん大丈夫だ……っていう楽観的な希望を捨てないよう
にしていた……けど……冬特有の乾燥した身まで凍えるような
空気が顔に刺さる中……ホテルが崩れていったのを見たとき……
何かが私の中で崩れていった気がした。

……あの倉庫街の戦いを見た後だから……かもしれないけど、あの死
闘とホテルの破壊は関係ないとは思えなかった。

私が首を突っ込んでしまった世界は……楽観的に考えていい世界で
はないと悟った。それと同時に、今までの自分を……一時でもいい
……せめて一連の騒動が収まるまで……この七年間生きてきた自分
を捨てようと決心した。

映画感覚で感じていた『前世』の自分……『フウ』に戻ろうと決心
した。

周囲に気取られないように『風香』にもなるけど、基本的には『フ
ウ』になるうって思った。

七年間の楽観的でバカな自分より……馬鹿は馬鹿でも中忍として経
験を積んできた自分の方にしないと、この騒動に首を突っ込んでし
まったからには生き残れない……。

せっかく手に入れた平穩が自分の手で崩してしまった……って考え
ると苦笑がこみあげてくる。

せっかく『化け物』って言われる生活からおさらばしたと思ったの

に……馬鹿だな……

……風香ねえは最近ちょっとおかしい……

俺から見た双子の姉：風香ねえは、明るくてドベで挑発に乗りやすい馬鹿だった。……なんか悪口みたいだけど、本当にそんな感じだし、それが風香ねえなのだから仕方ない。

でも……数日前から風香ねえは、ただ明るいただけではなくなった。

たまに……なんていうのかな？大人って感じの表情を浮かべるときがでてきたのだ。
なんでだろうか……って思ってたら、今朝になって更に大きな変化が起こった。

いつも通り明るくて馬鹿をやって……算数の問題で間違えてアハハ
〜って笑っているけど……

ふと見ると、顔に表情がないのだ。

いつもの風香ねえを知る人なら驚愕するくらい怖い感じの無表情……
…何にも感じていないような……深い闇を抱えているような……そんな感じの表情だ。

ちなみにこの事実気が付いているのは俺だけだ。

仕事が休みで朝ご飯と一緒に食べた母さんは気が付かなかったし、
担任の先生も気が付いていない。

幼馴染の優実ですら気が付いていないのだ。

ここまでみんな気が付いていないとなると、俺がおかしくなったのかも
もしれない……

「……………う！……………土郎！！」

バシィッと頭を急に叩かれたので、俺は痛みで机に伏してしまった。

「痛いじゃないか！……って風香ねえ！！」

「ったく……返事は早くしなさいよ！！」

「……どうしたの？」

「ん？……ほら、じゃっじゃじゃーん！！」

そう言っ得意げに何かを俺に見せてきた風香ねえ。

見てみると……

「……77点？」

さっきの時間にかえされた算数のテストだった。

「そう！ラッキーセブンでいいでしょ！！」

「ラッキーセブンは777だよ？っというか……今回のテストって80点以上が合格なんじゃ……」

「細かいことは気にしないってことよ！

だいたい算数が日常生活の何に役に立つって言うの？平均60点の私からしてみたら、この点数はもう最高って感じなの。しかもこんな運命的な数字って……あゝなんかいいことありそう！！！！」

めっちゃくつちゃ喜んでる風香ねえ……うん……やっぱり俺の勘違い……かもな……

でも……一卵性でなくても俺たちは双子だからかな？……なんとなく風香ねえが無理している気がしてならなかった。

「おっ！！ラッキーセブンの一歩手前ジャン！！」

乱入してきたのは優実だった。……ちなみに、さっき見せてもらっていたけど優実の点数は83点っていう微妙な数字だった。

「あゝ……何って言うのかな？ちよつと優実に負けて悔しいかも……でも、ゲームでは優実より強いからいいか！！」

「何言ってるの？この間私に負けた分際で……」

「負けてない！！アレはただ……そう！！手が滑っただけだ！！」

「へえゝ……6回も手が滑ったんだ。」

「うう……そ……そもそもだな！！土郎は何点だったんだ？」

……話題変えたな……風香ねえ……黙ってテストを見せる。

「へえゝ……つてすご！！98点かよ？」

「意外に土郎って凄いな……姉とは違つて。」

「おい！！もう一回言ってみなよ！何て言ったの？」

「（無視）……それより……最近物騒ジャン？それについてなんだけど……今日さ、午前中授業だから一緒に真相を確かめない？」

突然、優実が提案をしてきた。

「ほら、昨日もホテル爆発あったし、殺人事件も多いでしょ？」

だから私達で解決してみない？」

優実の目がやけに真剣だった。

……優実の両親は刑事さんだ。だから……連日して事件が続いたりしているとな親の力になりたいのか、今回みたいな提案を唐突にしてくる。……きっと今回も親の役に立ちたいのだろう……。

でも、いつも捜査の役にたてることはないんだけど……優実の気休めにはなると思って……あと、俺たちも『捜査』ってなんか楽しいし協力しているのだ。

「やめな。」

だから……低いけど……でもキツパリこう言い放った風香ねえに驚いてしまった。

「なんで！？いつもなら風香が真っ先に……」

「いつもならね！でも今回はヤバすぎるよ……」

「なによ！怖いわけ？」

「………こ……怖くなんかないもん！！でもさ……」

「あ……！！怖いんだ！！怖いから行きたくないんだ……！！」

……優実の悪い癖が始まった……

俺は頭を押さえた。……珍しく断った時はこう言うことで……風香ねえを挑発して仲間に引き入れるのだ。

例えば……そう……『黒板消し落としゃろうよ!』って誘われたときも、眠かった風香ねえは断ったのだが、優実の挑発で『分かったよ!ーやればいいんでしょ!ー上等じゃないの!』って言って……結局……黒板消しが命中した先生に風香ねえは叱られた……って事が、この間あったな……。

「……怖くなんてない。でもさ……私たちがやっても邪魔になるだけだと思う。」

お母さんが見てたドラマでも、下手に入っていつて捜査を滅茶苦茶にしちゃうシーンがあったもん。」

……風香ねえにしては珍しく正論だな……本当に行きたくないのだから……。

でも……そのせいで優実がプウ~~~~と膨れてしまった。

「何よ何よ!ーもう風香なんて知らない!ー!」

そう言って自分の席に帰ってしまった。

……優実は怒ると怖い……

風香ねえと隣の席なのに、話そうとしなかった。

休み時間に風香ねえが話しかけても、必要最低限の話だけするとプイッと拒絶するかのように、風香ねえに背を向けたり……移動教室

の始まる前になると風香ねえと俺と優実で一緒に行くのに、さつさと俺だけ連れて優実は教室を出てしまった。……風香ねえが追いかけてくる気配はない……

「さてと……土郎と一緒に『捜査』するでしょ？」

当然でしょ？って顔で優実は言ってきた。

きつと……ここで断ったら俺は風香ねえと同じ仕打ちを彼女から受けるのだろうな……

でも、それを考えなくても、俺の答えは決まっていた。

「決まってるだろ？手伝うよ。」

そう言つと、ぱあーっつと笑顔になった優実。

「だよね！！あゝ怖がりな誰かさんとは違って本当に土郎はいいやつね！！」

じゃあ……帰りの会が終わったら、すぐに教室をでて私の家に行こ！あの人は足が速いけど積はいちばん端っこだから、追いつかれなように精一杯走ろうね！！」

笑顔でそういう優実……ちよつと風香ねえが悪く言われすぎのような気がするけど……風香ねえを説得するのは難しそうだから……『捜査』をしたいから、風香ねえは邪魔だな。

だって……クラスにも行方不明で休んでいる友達がいる。だから……俺は……その子を探したい!!

俺は優実の提案にうなづいた。

7話 捜査

「…………えつと…………次の角を左ね!!」

私…花里優実は土佐犬の次郎にまたがって夜の街を進んでいた。

本当は士郎とも一緒に『捜査』をしたかったのだが、自分たちの脚となつてくれるもう一匹の土佐犬…ハナが士郎が乗ろうとすると暴れまくつて、士郎に生命の危機が生じ始めたので仕方なしに自分だけで『捜査』に乗り出すことにしたのだ。

…冬木市で連日起こっている行方不明&殺人事件…

捜査1課の刑事である私の両親はその事件のせいで、ここ数日…姿を見ていない…………
電話をかけても出てくれない事が多い。

学校であつた事とか風香や士郎と遊んだこととか話したいのに…………
本当に寂しくてたまらなかつた。

だから、自分も協力して、早く事件を終わらせたい!!そう思って今回の『捜査』に踏み出したのだ。
ちゃんと『武装』もしてあるし、次郎もいるから安心だ!

だって、次郎は強いんだもん!!

私の大切な家族の次郎は、顔はイマイチだけど、おっそろしく強く
て、なんかの大会で優勝したくらいなんだから！！

で、そんな次郎と2人で私は『廃工場』に向かっていた。
まずは、怪しげなところを全て当たらないといけない。

学校での『聞き込み』だと、怪しいところは『霧の中から現れる森
の洋館』か『廃工場』……私が選んだところは『廃工場』だ。
その方が近いし……

「もう少しだよ、次郎……って……」

次郎が急に走るのを止めた。なんだろう……って思うと……

「ココから先に入っではいけないよ」

目の前に立っていたのは知らない蒼が似合う黒髪の青年にだった……

……

… 土郎に優実の向う所を聞きだして先回りした私。

… … … とは言っても、『風香』の姿で外を… … … しかも夜に出歩くのは危険なので、影分身を家に残して私自身は『変化』をして外に出た。

… … … 『影分身』に行かせた方が得策かもしれないが、万が一… … … 倉庫街にいた誰かに見つかって、戦闘になった時に、影分身で優実を守りきる自信がなかったからだ。

ちなみに、今の私は『滝隠れの里』の若き里長『シブキ』に変化している。

… … … 適当な人物がそれしか思いつかなかったのだから仕方ない。

「誰…？」

「答える筋合いはないね。」

だが…重ねて言うが、ココから先に入ってはいけない。」

目の前の優実突然現れた私に驚いているみたいだったが…すぐに気を取り直してきつい顔に戻った。

「私、廃工場に捜査しに行きたいの…！」

「ダメだ。こんな時間の子供の一人歩きは危険すぎる。」

廃工場に何かがあるかは知らないが、ハッキリ言って平時でも子供が一人で行くところではない。増してはこの異常事態だ。何が潜んでいるのか分からない。

「一人じゃないもん…！次郎がいるもん！」

「それは犬って言うんだよ…御嬢さん。」

だから帰りな。」

「いやだ…！私は調べないといけないんだ…！」

…デカい声だな…

この辺り一帯に響き渡るくらい大きな声で『嫌だ』と叫ぶ優実…

一応、私が風を操って声が『怪しげな廃工場』の方に行かない様にしているからいいモノの……

「えっと……いいかい？ だいたい君には力がないじゃないか。」

力づくで気絶させて、家に連れ帰ってもいいのだが……そんなことしても、どうせ優実の事だ。

明日も同じことを繰り返すだろう。

そうならないようにするには、今ここでしっかり言って返した方がいい。

「力が無い以上……ここから先の『捜査』は子供が首を突っ込んでいいことではない。

もし……君が私を倒すくらいの力があれば、話は別だが……」

優実がしゅん……となつてうなだれたように見えた。

よし……それでいい……

これで帰ってくれるはずだ。

「さあ……家まで送ろうか。」

ココに長居するのは、私だけでなく優実も危険だ。

いつ……何が起こるか分からないのだから……

私は彼女に触れることができるくらい近づいた。
……変化してある関係で、私の身長は彼女より高い。
だから視線を合わせるために、少しだけしゃがんだ。

「倒せるよ。」

「えっ?」

突然、…よつやく聞こえるくらいの声で、ぼそり…とつぶやいた優
実……。
そして……

ドサツ!…!

優実の小さい身体が私にぶつかったとき…鋭い痛みが胸にはしった。
痛みあまり地面に私は倒れてしまった。
何とか目を開けて…優実を捕えると……

がたがたと震える優実の手には銀色に光るナイフが握られていた。
先端からはポタリ…ポタリ…と赤い液体がしたたり落ちていた。
返り血を浴びた優実の顔は、青を通り越して真っ白だった。

「…わ…悪くないもん……私は…悪くないもん……
アナタが……倒したら…通っていいって言ったから……だから……

私は……私は……

行こう、次郎！……！」

薄れゆく意識の中……走り去っていく優実と次郎。

「ま……待ちな……！！ぐっ！！！！」

手を伸ばそうとするが、激痛が走って動けない。

ボワン……と変化が解けた気がした。

ドク……ドクつと闇に生える深紅の色が服や接するアスファルトを染めていく……

……一応……とっさに心臓を外したけど……それでも致命的には変わらない。

こうなるんだったら、前世で医療忍術を学んでおけばよかった……

「……まさか……こんなところでお目にかかれるなんて……」

だれか……女の人の声が聞こえた。

かすんでいく視界がとらえたのは、長い髪を一つに行いた女性……

でも、問いただす気力はもうなく……

私の意識は闇に沈んでいった。

8話 あこがれの人

…目を開けると、そこに広がっていたのは見知らぬ天井…
私は見知らぬ殺風景な和室の布団に寝かされていた。
窓からは太陽の光が差し込んでいる…遠くで車が走る音が聞こえた。

「…つつー！」

上半身だけでも起き上がろうとすると、腹部に痛みが走った。

……そうだ…私…優実に刺されて…

ん？でも……包帯が巻いてあるし……出血している感じもない……
いったいだれが……？

その時、ガラリつと障子が開いて、1人の女が姿を見せた。
歳は中学生くらい……だろつか？髪が長く後ろで一つにまとめている。
ほんのりと酔の匂いをさせた彼女は目が覚めている私を見ると、少し微笑んだ。

「ほう……もう動けるのかい。」

「あ……あの……私……」

「ほら、これ食べな。毒は入ってないから安心しなよ。」

少女が持っていた盆を私に渡してきた。
上に乗っかっていたのは、まだ湯気が立っている味噌汁だった。中に
白米が入っている。

…他にもネギやら大根やらも混ぜられている。

「早く食べな。」

「あ…ありがとうございます。」

一礼してから味噌汁をすする。

…母親の作る味噌汁より美味い…

ほんのりと蟹の味がして、これだけで何杯でもいけるかもしれない。

「どうだ？私の店で出ている味噌汁だ…って言っても、残り物を
温めた奴だけだね。」

「店？」

「ああ、私の家って寿司屋なんだよ。深山町の商店街の寿司屋。
私も夜は基本的に店の手伝いをしているのさ。」

そう笑って彼女は答えたが…急に真顔になった。

「…で、あんた…どこの出身だ？」

「え…？えっと…この町ですけど…」

「そうじゃなくて…前世だ前世。どこの里出身の忍かって聞いて

るんだ。」

……今この人…何て言ったんだ？

私が戸惑っていると、痺れを切らしたのが厳しい顔をしてドンっと床を叩いた。

「早くいいな！！！」

「……滝隠れの里の中忍…だ。」

「ほう…やはり『滝』か……」

「やはり？なんでそう思ったんですか…ってか、アンタ何者だ！？」

「何者って言われても、アンタと同じ…前世が忍者だった者さ。」

なんでアンタが『滝』かと思ったか…か？簡単だ。あんたが滝の里長に『変化』してたからさ。

あそこの長は内気だからね…そう簡単に表に出てくる奴じゃない。

「

彼女は、そう言うとおペットボトルのお茶をグイッと飲み干した。

「で…忍者時代の名前は？」

「……ふう……」

「ふう……『滝隠れの里の中忍・ふう』……か。

私の名前は海原 柚木……前世の名前はユギト。

『雲隠れの二位ユギト』って言ったら結構名前が知られていたんだけど……」

「二位…ユギト…って……！！！」

知っている!!
私と同じ…尾獣を体内に飼っていた人だ!!
噂で聞いたことがある……確か二歳の時に尾獣を封印されて、里の人たちに嫌われながらも実力で認めさせたって聞いたことがある。
私の憧れの存在だった人だ!

「まあ…知っていても知らなくても今はどうでもいい。
にしても……アンタ……幻術が苦手でしょ?」

「な……なんでそれを…!!?」

「アンタを刺した子…幻術にかかってたんだよ。

おかしいと思わなかったのかい?

たかが七歳の子供が隠し持っていたナイフに気が付かないほど抜けているのかい、滝隠れの忍者は?」

「そ……そんなこと……!!」

『ない』と言おうとしたが、口をつぐんでしまった。
言われてみたら確かにその通りだ。

いくら優実に対する警戒心がなかったとはいえ……気が付かないなんておかしい。

だって私は一人前の忍者…中忍だぞ?

前線から遠のいていたとはいえ、そのくらい気が付くに決まっっている。

幻術で認識を阻害されていた……ってこと?
だからナイフに気が付かなかった……

そういえば……

「……なんで……優実はあるに力があつたんだ？」

なんで優実私の気を失わせるくらいの怪我を負わせることが出来たんだ？

だって…彼女は七歳だ。

しかも女の子……激怒しているからとはいえ、相手の致命傷になるくらいの傷を負わせる力なんて持っているわけがない。

ましては今は冬……私は結構厚着をしていた。

コートやらセーターやらを貫通させて肌にナイフがたどり着くだけでも一苦労なのに……

「まさか……優実も……」

「それはないな。」

断定したユギトさん。

まっすぐ真剣なまなざしで私を見てきた。

「アンタに応急処置レベルだが、医療忍術を施した後、分身にアンタを任せ、私はあの子の後を追った。

……で、彼女は廃工場の中で人格が変貌した。

赤い短髪の女と向かい合っていた時にはすでに彼女は人ではなかった。」

「人では…なかった？」

人ではなかった？どういう意味だ？

ユギトさんはうなづいた。

「『呪印』というものを知っているか？」

確か聞いたことがある……気がする。

何という名前だったか忘れたが……どこぞの抜け忍が開発した禁術で、それを施されると強靱な力が得られる……反面、副作用で死に至ることもあるのだとか……

「噂程度なら……でも……それがなんで……？」

「私も噂程度でしか知らないが……アレに似ていたな。」

彼女が、赤髪の女の所に来た時にはすでに異形とかしていた。肌は黒くなり、黒めが黄色に変化していて、角が生え……般若のような顔をしていた。

あのままだったら……赤髪の女は死んでいたかもしれないが……

だが……私が介入する前に終わったよ。」

「終わった……て？」

「……」

激痛に結局耐えられなかったのだらうな。」

ユギトさんは目を細めた。

「いつ彼女に呪印が施されたのかは分からない。

だが……あれは私が知る限りの『呪印』の特徴と一致していた。」

「でも……呪印って施されるときにも激痛が走るって聞いたことがあります!!」

たしかに優実ちゃんは気が強かったけど……七歳の子供が耐えられるとは……」

「それは彼女が『忍者』だったらの話だ。

実は……幸いなことに赤い髪の女は簡単に幻術にかかってくれた。

だから優実……といったか?彼女の遺体は私が回収することが出来た。

そこで調べてみて分かったのだが……

彼女には経絡系はなかった……が、代わりに存在した似たような回路がスタスタになっていた。

おそらく……そこに『呪印』の力が働いたのだろう……

似たようなものだが別物だ……その分……効力が発揮されるまでに時間がかったのだろう。

おそらく……その能力が効きはじめた時に、アンタと出会い……呪印が発動した。

見なかったか?彼女の身体に不思議な刺青が刻まれ始めていたのを……」

私は黙って……あの時のことを思い出そうとした。

そういえば……言われてみたら、あの時の優実の腕……になにか黒い斑点のようなものが現れていたような……

「でも……一体誰が……呪印とか幻術とか使って一体何を……」
「そこまでは私も分からないさ。」
「まあ……軽率な行動は慎むように！」

そう言っただけでユギトさんは私の頭をポンポンと叩いた。

「……さてと……」

「じゃあアンタの家と優実って子の家……教えてくれる？」

「……なんで？」

「そりゃあ決まってるだろ！」

「あんた……こんな時期に無断外泊したんだからな！」

「私が言い訳を考えてあげたから、それを親御さんに説明しに行くのさ。」

あとは……」

……
そう言っただけで押入れから何かを取り出したユギトさん。

「とつても大きなリュックサックだった。まるで私一人入るくらいの」

……

「ま……まさか……でも、優実ってバラバラにしたんじゃ……」

「誰が死にかけのアンタの傷を治したと思ってるの？」

「バラバラにしたとしても、多少なら原型に戻せるくらいの技量は持っているんだから。」

「……このまま行方不明っていうより、こうした方が……この子の親御さんのためにもなるだろ？」

「何年も帰って来るはずのない娘を待つより……こうした方がいい。」

ユギトさんは無表情だったが……声が少し震えていた。

「……………あ……………そうだ……………」

カレンダーを見たユギトさんが何か思い出したみたいな声を上げた。そしてすまなそうに私を見た。

「悪い！アンタを家に連れて帰る前に、寄るところが出来た！！先にそつちに行つていいか？」

「別にかまいませんけど……………どこに行くんですか？」

「死んだ兄貴の友人の奴が実家に帰ってきているみたいだからこの間会いに行つたんだ。」

そしたら死にかけてね……………飯もろくに食べていないみたいだから、3日に1回は、さつきフウに飲ませたのと同じ味噌汁とかを差し入れに行つてるのさ。」

「へえ……………」

この人…意外と世話好きなのかもしれない……………だから私を助けてくれたのかもしれない……………

「別にかまいませんよ。」

「よかった。つき合わせて悪いな……………あっ！そうそう……………」

あんた……………私が『いい』っていうまでは別人に変化してな。

なんかアイツさあ…ヤバいことに首ツッコんでいるみたいだしね。
私は何とかするけどアンタは何とかできなそうだしさ。」

「わ…私だって…ヤバいことになったら何とか…しますよ!!」

「へえ〜…ならなんで、あんな目立つマネをしたのか聞きたい
ね。」

まあ……『前世の記憶』って奴は七歳児じゃ実感わかないし、『精
神が身体に引きずられて』ってこともあるから仕方ないかもしれな
いけどな。」

そう言っただけで意味ありげに笑うユギトさん……

まさか……

「もしかして……あの時倉庫街に……?」

「『口寄せの術』で猫を呼び出してね。」

今から行く知り合いが『ヤバいこと』に首ツッコんでいるみたいだ
からさあ………だけど何をするのか具体的に分からないとなったら、
私も気になってきてね……。

だから『口寄せの術』で通常サイズのネコを何匹か召喚して見回り
させてたのさ。」

夜は私自身も変化をして見回りをしているけどな。」

気が付かなかった……まさかアレを目撃してたなんて……

今思えば幼稚な行動だったと思う……ああ!! 思い出すだけで顔が
赤くなる!!

「…失敗は誰にでもあるさ。」

一応、なんとかごまかせたみたいだしね。

まあ……万が一のために、変化をやってること。ごまかしきれない人もいるだろうしね。

ほら、行くよ!!」

またポンポンと私の頭をなでるように叩いたユギトさん。

そのまま障子を開けて外に出て行った。

私は一歩遅れて彼女の背中を追いかけた。

8話 あこがれの人（後書き）

ユギトさんが死んだのは、フウより後ですが、転生する時に生じたタイムラグで、ユギトさんの方が先に転生しています。

9話 死にかけの男

……冬木市の西側…開発真っ最中の新都とは逆に、古くからの町並みを残す『深山町』…

そこにある人気デートスポット…海を臨む海浜公園…そのベンチに目的の男は座っていた。

……大半の人が『幸せの絶頂!!』って感じで過ごしている海浜公園では、彼は異質のオーラをだしていたが、誰も気に留めない。

フードを深くかぶったその男の顔は、下を向いているので見えない……。

よれよれの黒いパーカーを着て疲れたようにただただ下を向いていた。

その人に向かってズカズカと進んでいくユギトさん。

すると彼女の存在に気が付いたのか、男は顔を少しだけあげた。

「まったく……なんで柚木^{ユキ}ちゃんは俺の居場所が分かるんだ？」

柚木？……ああ……ユギトさんの今世の名前か……

そりゃ……『口寄せの術』で呼び出したネコが教えてくれたからだけど……でも、そんなこと言えるはずもない。

「雁夜^{アンダ}の居そうなところくらい簡単に想像が出来る。

ほら、さっさと食べな。」

そう言つてユギトさんは、よく出前とかで使いそうな銀色の箱の中から味噌汁を取り出し、彼に渡した。彼はためらいながらも受け取った。

「俺なんかこんなに気を使わなくてもいいのに……」

「馬鹿！！アンタは兄貴の友人だろ。私とだって遊んでくれたことあつたし……」

それに、死にそんな奴を見過ごすなんて私には出来ないからな。」

……これを真顔で言つて見せるユギトさんつて凄いと思う。

フツーさ、男の人にそんなセリフ言う時つて赤面しない？恥ずかしくないんですか？

男の人は完全に顔を上げた。

……上目づかいでユギトさんを見上げるその人は……白髪で……左目が濁つたような感じの黄色で……傷みたいな痕もあつた。

だけど……生気を感じさせない外見だつたけど……不思議と『怖い』とは思わなかつた。

なんでだろうか？

「柚木ちゃんは優しいな。」

「……何度も言つているが、当たり前のことをしてるだけだ。さっさと食べな。あんた……ろくなもの食べてないだろ？」

彼は何も答えなかった。
ただ……静かにゆっくりと、味噌汁を飲み干した。
そして優しい笑みを浮かべながら……でも、どこか厳しい顔つきで椀を返した。

「ありがとう……でも、もう次はいいよ。」
「何言ってるんだい。本当は都合がつかぬなら毎日届けたいくらいだ。まったく……いい歳した大人が子供に養ってもらっただけじゃないよ。」
「ははは……まったくだな……」

自嘲気味に笑う彼……

「でも、本当にいいんだ。
……もう俺は長くない。もって一か月だ。
それに……何度も言っているけど、俺は今……」
「危ないことにかかわってんだろ？
知ってるよ。だが……何度言われても、半死人を見捨てるわけにはいかないな。」
「だが……？その人は？」

ようやく私の存在に気が付いたか……！
あ……ちなみに、私の今の格好は『変化の術』で大学生くらいの女の子に変化している。

「ああ…こいつは店のアルバイトの新人姉ちゃんだ。

紹介するよ。こいつは死んだ兄貴の友人の『間桐雁夜』っていうんだ。」

「間桐さん…ですね。

はじめまして。柚木ちゃんのお父さんの店でバイトをしています…
フウって言います。」

ココまで言い終えて、雁夜さんと目が合ったとき……突如、ゾクゾクつと悪寒が走った。

何だ……この感じ……

気持ち悪い……なんか…喉の奥から何かがこみ上げてくる……

そくだ……この感じは……前世で『七尾』の制御が出来なかったときによく似ている!!

もっと強くなつて、里の奴らを見返してやりたくて……

たしか……『七尾』を完全に支配下に置こうと修行してた時……あの強大すぎる力に太刀打ちできなくて…制御が出来なくなつたんだ。幸いにも忍袋の中に入っていた『兵糧丸』を飲んでチャクラを上げること、何とか抑え込んだんだ。

…でも、私の中にもうアレはいないはずなのに……

「ちよ…フウ!?大丈夫かい?顔色…真っ青だよ!？」

ユギトさんが私の背中をさすってくれている。
私は曖昧に笑った。

「へ…平気です…すみません…見苦しいところを…」

「つたく…調子悪いんだつたら早くいいなつて!!」

……つてか…雁夜も体調が悪化してないか!？」

見てみると、痛みをこらえるような姿勢をしている雁夜さん…顔からは汗がにじみ出していた。

「あ…ああ…大丈夫…だ…」

「そうは見えないぞ!!」

つたく…強情張りが増えたな……まあ…遅くなるから私たちは、
もう行くけど…

「アンタもムリすんじゃないぞ」

「ああ…分かってる…」

ユギトさんがその場から去っていくので、私は慌てて一礼をして、
ユギトさんの背中を追った。

「……で、一体どうしたんだい?」

ずっと黙ったまま歩いてたが、公園から離れて…新都へと渡る真つ赤な橋…『冬木大橋』の中ごろに差し掛かった時、ようやくユギトさんは口を開いた。

「……雁夜さんと…目を合わせた時に…前世で私の中に封印されていた『化け物』の制御が出来なくなった時みたいな感じがしたんです。」

そう言うと、ユギトさんは驚いたように眼を見開くと立ち止った。

「私はそんなことなかったぞ？」

確かに……『砂漠の我愛羅』みたいに、封印が解けたとしても尾獣の能力が忍に残るってことがあるし…

実際に、私にはまだ封印されていた『二尾』の残留チャクラがあるしな……」

「残留チャクラ？」

考え込むユギトさんに尋ねる。

「ああ…『尾獣』ってのは巨大なチャクラの塊だ。

だから封印しようとしても残留するチャクラがあるのさ。ほら、コップ一杯に入れてある水を別の容器に移したら、コップに少しだけ水滴が残るだろ？アレと同じさ。」

「じゃあ……封印される回数を重ねれば重ねるほど…尾獣は弱くなっっていくってこと？」

「いや……だいたい残留って言っても、奴らにとってはほんのわずかな部分さ。
だからそんな量……すぐに回復してしまうから、弱体化なんてしないよ。」

でも……妙だな……なんでアンタだけ……？」

再び考え込むユギトさん……。

結局、答えが出ないまま目的地に着いてしまった。

えっと……先に行っておくけど、ちゃんと今は『風香』の姿に戻っています。

さっきの裏路地で、誰にも見られていないのを『探査』まで使ったちゃんと確認してから戻った。

…玄関を開けて私を見た瞬間、母親は激怒するか……と思ったら、いきなり抱きしめられたので驚いてしまった。

「風香の馬鹿!!どこ行っていたの!!」

って泣きながら言う母親……荒々しい言葉とは裏腹に……そこには『私を心配してくれていた』という暖かなモノで溢れていた。
…前世では……こんなことはなかった。

「う……ごめんなさい……」

自然と目の前がかすんでくる。母親のぬくもりが私にもしみこんできて……なんでだろう？とつても暖かくて……暖かくて……

「おっ？泣いてんじゃん！！」

「な……泣いてなんか……ない！……！」

思いつきりユギトさんをにらみつけた。
母親もユギトさんに気が付いて、私を抱きしめたままユギトさんの方を向いた。

「あの……」

「ん？ああ……その子さあ……私の家の前で寝てたから、起きるまで保護してました。

本当は電話をかけた方が良かったと思うのですが……この子……電話番号知らなかったみたいで……

それで送ってきました。」

「そうですか。本当にありがとうございます……！」

でも…なんで……」

「じゅめんなさい……」

ゆ…優実ちゃんが…一人で『捜査』に行くって……で、止めようと思っ
て外に出ただけ…どこに行ったのか分からなくて…

で…気が付いたら疲れて柚木さんの家の前で寝ちゃったみたい……」
「そうか……」

そついうと、優しく私の頭をなでる母親……

「娘がご迷惑をかけました…本当になんとお礼を言ったらいいのか
……」

「いえいえ…気にしないでくださいよ。」

当然のことをやっただめです…じゃあな、フウちゃん。
これからは『危ないこと』に首を突っ込むんじゃないぞ。アンタは
まだ『子供』なんだから」

「ゆ…ユ…柚木さんだって…子供じゃないですか!!」

「私はアンタより大人だよ。」

そつ言っつてユギトさんは私に背を向けた。

…なんか……もっとユギトさんと話したかったな……

そつ思っつていると、ユギトさんが急に振り返っつて笑いながらこつ言
つたのだ。

「んじゃあな、フウちゃん。また来てもいいぞ。」

「は…はい!!」

心の中の暖かいモノがこれ以上ないってくらい膨れ上がった。
ユギトさんの背中が遠ざかっていく……

「あなた… 柚木さんって人に何かしてもらった？ …… その… 家に送ってきてもらう以外に？」

「え… っと… お店の味噌汁食べさせてくれた！ …！」

「お店の味噌汁？」

「うん！ 柚木さんの家ってお寿司屋さんなんだよ！ …！」

「へえ… …じゃあ、今度お礼に食べにいこっか？」

「やったー！ …！」

……ちなみに……

このあと、母親は、私と… それから学校から帰った士郎に『電話番号』を教えてくれた。

士郎は『なんでさ？ なんで急にいなくなっちゃったんだよ？』って言われたので『だって… 私は忍者だから』っていつておいた。 ……

もちろん士郎は信じてなかったみたいで、納得がいかない顔をしていたし、なんども問いただされたけど、はぐらかしてしまった。

……でも…… 一番うれしかったのは父親が仕事から帰って来た時だ。

もちろん… …こっぴどく怒られたのだが… …私は嬉しくて… …泣いてしまった。

あ……これは私がMだからってわけじゃないぞ。

……真剣に怒ってくれる父親が……私のために怒ってくれるという
とが嬉しかったんだ。

だって……前世の私にそんな人はいなかったから……

10話 水質調査

「……………征服王…ねえ……………」

ぶつちやけて言うと、あんな破天荒な大男が、かつてこの世界の半分を征服したのかと思うと……………ちよつと微妙な気持ちになってきた。

事の始まりは……………今日…母親について、土郎と買い物に行ったときのこと……………

『風香が帰ってきたんだから風香の好きなもの作ろうね!』

『じゃあホットケーキがいい!!』

『…風香ねえ…それは夕飯には合わないと思うけど……………』

…とこんな感じで、にこやかに話しながら地元のスーパーに向かっていた。

その途中で”見覚えのある大男”…ライダーとすれ違ったのだ。

なんというか……とつても異様な格好をしていた。

だって冬なのに半袖Tシャツ一枚だぞ！？

寒くないのかよ……。

私だけじゃなくて母親も土郎も…そのほかすれ違つう人たち全員の注目的になつてるよ！？

…んで、周囲の人たちの視線がライダーに注がれる中……一瞬、物凄^レい視線を感じた……。

方向的にライダーの視線……恐らく…私が『倉庫街に現れた謎の生^{ネコ}物の仮の姿』と同じ背丈格好をしていたからだろう。

ここでバレたらせつかくの苦勞が水の泡だ。

私は母親や土郎といつも通りに接つした。

……たぶん…ライダーには『ネコアルクと同一人物』だと気が付かれなかった……と思う。視線を感じなくなったから……

だが……念には念を入れなくてはならない。

ライダーとの距離がかなり離れた時に…2人にばれない様に…影分身と変化を同時に発動させた。

影分身に変身させたのはネズミ。

本当は人に変化させてもよかったのだが、これから尾行する男は…透明になつたり空飛ぶ牛を持っていたり…不思議な能力をもつ者だ。

人だとデカすぎて気が付かれてしまつかもしれない。

……となったら、こっそり尾行できるネズミみたいな小動物がベストー！

……つてか……この術って本当に便利だな……

『影分身』と『変化』の組み合わせって上手く使えば、この世界なら泥棒とかも出来るんじゃないか？

……万が一の時のことを考えてやらないけど……生活に困った時にはいいかもしれないな。

……犯罪だけど……

……つて……それは置いておいて……

とりあえず……影分身が消えて『影分身が積んだ経験値』が脳内に流れ込んできたのは夜……トイレに起きた時だった。

今回は前回とは違い……影分身が『潮時だ』と判断してから、気が付かない間に消えたので……前回みたいなの『馬鹿丸出し』の消え方ではない。

……で、分かったことだけど……

どうやら…結局気が付かれなかったみたいだ。

あとからこっそり私達の後をつけることなく…川に向かったから…

新都と深山町の境目にある未遠川…そこでなにやら『水』を採取していた。

『まったく王たる余がなんで水汲みを…』

つとかブツブツ言いながらもしっかり大きな手で小さな試験管に水を入れていく…

…ってかき、自分で『王』って言うなよな……どんだけナルシストだよ……

ん？でも……倉庫街で堂々と『余の名前は征服王』って言ってたよな？

……もし本当に征服王……イスカンドルだったとしたら……？
いや待て待て……とつくの昔に死んだ人だぞ。
死んだ人をどうやって甦らせるんだ？

そう考えている間にも、ぶつくさ言いながら水汲みを続けるライダー！。

……それにしても……何故水汲みなんかしているのだろうか……考えられるとしたら……水質調査……ってことかな？

ライダーの主人……に見えない少年は、デスクワーク派っぽかったし

……

自ら前線に出て戦うってより、家にこもって研究って方が似合っている感じの雰囲気だしてたもんな。

でも…なんで水質調査なんかするんだ？

…重そうな鞆を抱えたライダーは、そのまま一つの小さな家に入っていた。

…私は外にいたので中が見えない……
ネスミ

だから出来る限り家の窓に近づいて耳をすませた。

…なんか……食事……しているのかな？

『気取らぬ家庭の味こそ最高のもてなし！！』

…つとが言ってるぞ？

…つまり……急にやって来た……ってことか？

……あまり有益な情報は手に入れられそうにない……

…まあ……私の存在に結局気が付いていなかったみたいだし……
目的は達成されたから……ここで消えても構わない。

でも……あの『水』の活用方法が気になるんだよな……

…少し……様子を見ることにした。

すると、多少は進展があった。

食事が終わり…部屋に戻っていく少年…ウェイバーと大男ライダー。
で、彼らの話から分かったことがいくつもあった。

まずは…彼らは聖杯戦争という戦争の参加者だということ…

アレは本当に征服王本人だということ…

水質調査の結果…水の中に魔術を使っていた痕跡があったこと…
で、その魔術を使っていた奴が、今回の連続誘拐殺人事件の犯人だ
ということ…

んで…これからその犯人のアジトに行くぞ！！ってところで影分身
は『消える』ことにしたのだった。
だって…そこまで首を突っ込む気にはなれないから…

正確に言えば、首を突っ込みたくても突っ込めなかった。

だって…奴らはさあ…倉庫街の時にも乗っていた牛にひかれた
戦車を剣一振りで召喚すると、それに乗っていつちやっただから
…

アレを追いかけるのは一苦勞だ…
ネズミでは追いかけれないから別の…もう少し体格の大きい動物

に再変化しないといけないし……
ああいう奴って意外と勘が鋭いから、これ以上大きな姿になると、
気が付かれやすくなると思うし……

…そう判断したから影分身わたしは消えることにしたのだった。

……それにしても……

やっぱりここしばらく続いている連続誘拐殺人事件はその…あの時
倉庫街にいた人たちが行っていた『聖杯戦争』ってもののせいで起
こった出来事だったんだな……

まあ……セイバーさんやアイリスフィールさん…それにさっきのウ
エイバーさんと征服王とかの仕業ではなく、『キャスター』って人
の仕業みただけ……

でも……その人のせいで、まだ親たちは知らないけど、優実が死ん
だんだよな……

もしかしたら……『呪印』ってのを優実に使ったのは、その『キャ
スター』って奴かもしれない!!

……そう思うといてもたってもいられなくなってきた。

だって……最後の方はギクシャクしてたけど、私の親友で幼馴染だ

よ？

このまま敵も何にもとらないなんて……悔しくてたまらない。

それに……勝手に一般人に『呪印』をするなんて……何でそんなことをしたのかも気になる。

……でも、このまま気分にならせて今夜で歩くのは危険だ。

しっかり準備をしてから出かけないと振り返ちに合うかもしれない。

だって……幻術を使うような奴だ。

その対策もしっかり練ってから行かないと……

思わず飛び退くくらい冷たい水で、高まった熱を冷ますように、私は顔を洗った。

11話 狂ったカエル

「よかった……」

頬を赤らめて私…遠坂 凜はつぶやいた。

学校を休んでいる……おそらく、冬木市で横行している連続誘拐殺人事件に巻き込まれたのである。友達のコトネを助けるため、お母様やお父様とした言いつけを破って私は避難先の禅城の家から抜け出し、1人で冬木に戻ってきたのだった。

……戻ってきた町はまるでゴーストタウンを思わせるくらい人通りがなかった。

ただ…時折パトカーの赤い回転灯の光が見え、そのたびに急いで裏通りに隠れる。

……こんなところで見つかって家に帰されたくない。

今回の事件は、お父様の参加している聖杯戦争という7人の魔術師が参加している戦いに関係しているものに違いないのだ。

それに…おそらく巻き込まれたのであろうコトネ……
いつも私に頼ってくれていた内気な彼女は……きっと助けを待っている……

今も苦しい思いをしながら待っているに違いない。

危険なのはわかってる。でも……私は友達を救いたい!!

そう思つて、お父様から頂いた『魔力針』を頼りにコトネを探した。
結果は大成功！

怖いお兄さんが、みんなを操っていた光るブレスレットを、お父様から教えてもらったことを思い返しながら…魔力をコントロールして破壊すると、お兄さんが監禁していた私と同じ年くらいの子供たちの意識が一斉に戻ったのだ。

……コトネを含む…監禁されていたみんなは、今は警察の人たちに保護されている。

私は保護される前に…気が付かれないようにこっそり抜け出してきた。

だって…魔術の事とか聞かれましたらまずいし……

「さあ…帰ろう。」

「やったよ……お父様。」

そうつぶやいて、今回頼りにして進んできたお父様から頂いた『魔力針』を開けた。

一見するとコンパスのようだが、これが示すのは方角ではなく魔力の大きな方向だ。

一足早い…お父様からの誕生日プレゼント……

「な…なにこれ？」

さっきまで安定していた針が、いきなりビリビリっと火花を散らしたかと思うと、突然グルグルッと回り、針が斜め上を指した。

《…魔力針がこうなった時は、まだ凜の手には負えないモノだ。》

脳裏で父親の言葉が蘇るのと同時に、びちゃびちゃっと音を立てて、何かが空から降ってきた。

…暗い路地裏なのでよく見えないが…なにやら生物のようなモノ…だということだけ分かった。

そしてそれが…自分の手には負えないモノだということも…

この場から逃げ出したい！！でも…金縛りにあつたみたいに、手足が全く動かない…

コトネを助け出した時には感じなかった感情…これが『死の恐怖』というのかもしれない…。

いやだ…逃げたい…！！でも…動かない…！！

目の前でうごめいている『何か』から目を離せない…！！！！

そう思ったとき、一陣の風が私の横を通り過ぎた。
何だろう！？っと思えば、バツッと後ろを振り返った時……そこに立っていたのは自分と同じくらいの背丈の子供だった。
だが……夜なのにキャップ帽をかぶっている上から、コートの手ドをかぶっているの顔が見えない。

「子供が見るには早いよ。」

誰なのかと問う前に、その子の拳が私のおなかに当たる。

「くはっ……！」

お腹の空気が押し出され……私の意識は沈んでいってしまった……

黒い野球帽をかぶった上からコートのフードをかぶると……私……風香はこっそり家を抜け出した。

変化をした方が得策かもしれないが……今は夜だ。

こうするだけで、顔を認知するのはかなり困難になるから……変化をしてチャクラを浪費する手間が省けるのだ。

ちなみに……家族に怪しまれないために『影分身』を作り出して置いてきた。

これで『風香は留守にしている』と思わせることができる。

……ユギトさんが言っていた通り、もう家でおとなしくしているのがいいのかもしれない……

でも…… 真実を確かめたい。

キャスターという奴が本当に『呪印』を優実に植え付けたのか……？

一体何の目的で？ 何でその『聖杯戦争』ってのとは無関係な人を巻き込むのか…… っつてことも気になった。

だって…… 少なくともライダーやセイバーさん達は無関係な人を巻き込む雰囲気はなかった。

でも…… なんでキャスターって人は巻き込むのだろうか？

それが分からない……。

「……！」

眼を閉じて『探査』を発動させながら走っていると、巨大な力の塊みたいなものを発見した。

… キャスターだろうか？

そう思っつてパトカーの目を避けながらゴーストタウンみたいになっ
てしまっている町を走り続ける。

反応のある方に近づいていくと、巨大な反応の前に、小さな反応が
あった。

眼を開けてみると、裏路地にツインテールをした赤いコートを着た
女の子が、隠れるようにして立っていた。

手に持っている何か小さなものを凝視しているみたいに見える。

すると、その女の子の目の前に、なにやら『生き物』のようなものが落ちてきた。

ココからだとよく分からないが……その『生き物』は軟体動物に似た触手をウネウネさせていた。

女の子は逃げなかった……いや……恐怖のせいで動けないのだろう。

……このままだと彼女の身が危ない。

私は手を前に突き出した。『風を操る能力』を使って……軟体動物がその場から移動できない様に……例えるのであれば結界を張るみたいに、風で軟体動物の周りを覆った。

女の子が振り返ってきた。

恐怖で女が見開かれていた女の子……あ………たぶん私の顔は分からないと思うけど……何か聞かれたら面倒だな……

それに……あの『軟体動物』を処理するところは……あまり見ていて気分のいいものではないと思うし……気絶させた方が彼女のトラウマにもならないだろう。

「子供が見るには早いよ。」

そうやって私は女の子の鳩尾に拳を入れる。

「くはっ……!!」

女の子の口から空気が押し出され……彼女の重みが私にかかってきた。

さてと……気絶したみたいだな。

それを確認すると、私は片腕を振り上げた。

軟体動物共の動きを封じていた風は、あっという間に奴らを切り刻んでいく……

あゝ……見ていて気分のいいものじゃないな……

風の刃が軟体動物の原型がなくなるくらい切り刻んでいく。

真っ赤な鮮血が軟体動物だったものから勢いよくとび散っていった。

辺りに血の海が広がっていく……

……さてと……私はキャスター探しに戻らないと……

おそらくあまり遠くには行っていないと思うし……

でも……この女の子が邪魔だよな……

「君は……何者だ？」

振り返ると、昨日会ったばかりの白髪の人……たしか間桐雁夜だったわけ？が立っていた。

丁度いいや。

私は女の子を彼に押し付けた。

「その子…安全な場所まで連れて行ってほしい。」

「凜ちゃんを？」

へえ…知り合いだったのか……ってかこの子の名前って『凜』って言うのか……

まあ…どうでもいいや。

「そつだ。私は急いでいるからな。」

私はそう言つと、彼の返答も聞かないでチャクラを足にためて一気に跳躍し…『木登りの術』を応用させて、ビルの側面を上へ上へ向かって走つた。

『凜』というらしい女の子を襲つた軟体動物共は上から落ちてきた。ということとは……上にキャスターがいるかもしれない！

……まあ……あの軟体動物共を使役したのがキャスターだとは限らないが……

でも、『子供を襲つ』っていったら…昨夜聞いたライダー達の会話

から察するに『キャスター』しか考えられない。

……それに……まだ発動している『探査』でも分かるが……このビルの上に『巨大な力』があるしな。

スタッと音も立てずにビルの上まで辿りついた私……。

「……さてと……アンタが『キャスター』か？」

目の前にいた……なんか目がギョロツとしていてカエルを思わせる顔をしている……本を小脇に抱えていた小男に向かって問いかけた。男の足元には……暗くてあまりよく見えないが……おそらく『血』だと思われる液体が広がっている……小男には外傷がないからおそらく……『別の誰か』の鮮血なのだろう。

小男がジィ……つと私を見た。

「いかにも……ですが……何者です？」

『キャスター』だということを肯定した小男が口を開いた。

私は、無表情のままのキャスターを軽くにらんだ。

……これが……優実の敵かたきかもしれない……

そう思うと、アツいモノが身体の奥からウズウズと登ってきた。

「……名乗るほどのものではない……」

「……1つ聞いておこう……私と同じくらいの背丈の子に『呪印』を植え付けたのは……お前か？」

「『呪印』？」

「……ああ……あの男がしていたものでしょうか？」

「あの男？」

「そう……！」

彼は言ったのです！！『私に協力したら、神がジャンヌに植え付けた偽りの記憶を取り除こう』と！！龍之介が集めた子供の何人かを差し出すことで、私に更なる力を与えてくれたのです！！」

「……何か別次元の扉を開いているように思えた……」

「……前世で任務の合間に道端で見た『狂信者』みたいな感じ……彼の眼は私を見ていなかった。そう……おそらく……この場にはいない『ジャンヌ』という人物を見ているのだろう。そして……その人物に関する協力を持ち出した男の姿を……」

「……どんな人物だった？」

「私みたいな汚れた人間ではジャンヌの素晴らしさは表現できません！……」

もうその立ち姿……振る舞い……それを現すには『聖女』の言葉に尽きます……！……」

「あ……そのジャンヌって人じゃなくて、『協力』を持ちかけた男の方ね。」

……話の流れ的に『ジャンヌ』について聞いてるんじゃないってことくらい気づけよ……！

「ああ……そっちのほうでしたか……」

そうですね……まるで『蛇』を思わせる顔立ちをしていましたよ。」
「『蛇』ねえ……」

アンタが『カエル』で、協力者が『蛇』かよ……そのうち『鷹』みたいな顔の奴が出てきたりしてね……。

つて、そんなことはどうでもいいや。

でも……蛇……か……

あとで『蛇』みたいな忍者についてユギトさんに聞いてみよう。

一応、教えてもらったことの礼は言っておこうか……。

いや……でも……さつき『凜』って子を殺そうとしてたのはこの男だぞ？礼を言うのはちよつとためられるかも……でも、情報は教えてもらったし……

「そうでした……」

ぼそり……とつぶやくキャスター……なんだろう？私をジィ……っと見てくる。

「あの男が言っていました。」

『もし私を探索する人物がいたら……迷わず排除しなさい』っと……
『排除出来たらジャンヌと私に新たな血肉を与えてあげる』っと。

半ば興奮した様子の彼の足元から……ずるずると下で見た軟体生物の触手が、地面から抜き出てくるように現れた。

「うう……！！」

やばい……あまり見ていて好ましいモノではない。

先程までは……裏通りで暗かったこともあり全貌を見ることは出来なかったが……今は月の明かりもあり、召喚された軟体動物の全貌を直視してしまった。

そう……それはまるで『蛸』を逆さにしたような……グロテスクな姿……
先程は見えなかったが、触手の中心にある口……のようなところには
鯨を思わせるような鋭い牙が生えていた。

「なんだよ……それ？ 『口寄せの術』とは違う召喚方法だと思っけど……
……なんとというか……趣味悪いな。」

「これは我が盟友プレラーティの残した魔導書により呼び出した悪魔の軍団。」

見よ、オルレアンに集ったどの軍勢よりも豪壮な私の新たな兵を！
やがては神の国に入り、ジャンヌを裏切った神々を引きずりおろす

ための軍団です！！」

…選挙みたいに堂々と呼びかけるように演説をするキャスター……
なんというか……いろいろとツッコミどころはあるが……悪魔の軍団
っていうより蝟軍団って言ったほうがいいんじゃないか？

まあ……狂った人物に何を言っても通じないか……
どっちにしろ、この人物は私を殺す気らしい。

まったく……ここまでこの男を動かす『ジャンヌ』ってどんな人物
なんだ？

たぶん……今までの情報から読み解いていくと、どっかの英雄なん
だろうけど……

あっ！もしかしてセイバーさんのことかな？

だって『ジャンヌ』って女の人の名前だし、セイバーさんは女だし。

……でも『騎士王』……つまり『アーサー王』って呼ばれてたよな？

……この男の思い込み……かもしれないな……

他人の空似ってあるし。

まあ……とにかく私はここにはもう用はない。

アイツは私を殺すみたいだから、情報は得られそうにないし……

そうと決まったら簡単だ。私は躊躇なく風を操り軟体動物共を切り
刻んでいく。

ぴしゃぴしゃ！……と軟体動物共から生み出される鮮血がビルの屋

上の跳ね飛んだ。

「さて……障害物の排除成功……って……!」

眼を見開いてしまった。

だって……血の海からまた再生するかのように、新しい触覚が地面から抜き出てきているんだから……

あっという間に元の木阿弥。

先程と同じ光景が広がっている。

……何度繰り返しても同じことだった。

それで分かったんだけど、どうやらあの軟体動物共は『血』を媒体にしているみたいだ。

で……新たにドンドンキャスターが生み出しているので……

その……目の前には数十体……いや、下手したら百を超えるんじゃないかってくらいの軟体動物がいた。

このビルが大きいからよかったものの……小さいビルだったら、下手したら屋上一杯がこいつ等で埋め尽くされているだろう。

事実……このビルでさえ、もうすでに半分以上が軟体動物で埋め尽くされていた。

……一体……どういう仕組みなのだろうか？

想像はついている。

恐らく……キャスターが大事に抱えている本……なんかの皮で作られた本がああな化け物どもを呼び出している……のかもしれない。だって……その『ジャンヌ』って人以外興味ゼロって人が大事に持っているものだよ？

しかも『魔導書』って言ってたし……

さて……どうやってアレを破壊するか……

「……うち……仕方ないな……」

風を操るのにもチャクラが必要だ。

このままだとチャクラの浪費は進む一方。

一気に決めるしかない！！

おそらくキャスターのいる場所は、あの軟体動物軍団の一番後ろ……

……いや……中心から少し後ろにずれた辺り……かな？

一応、後方の守りもしないといけないし……後ろからグサッってやられる危険性も考えているかもしれない……

一応『探査』をつかってみてみると、案の定……後者だった。

となつたら話は早い。

さっさとアレを破壊して退散しますか。

「くふうすいか颶風水渦の術！！」

『水遁・破奔流』で掌に水の渦を作りだし、それを水の竜巻にかえる。寸前に風の力を加えた。風が水の竜巻の外側で乱回転することで、竜巻を内包した霧の壁を作り出した。

突如現れた巨大な霧の壁は、私の姿を隠した。しかも風の力で壁に挑もうとする軟体動物共は、あっという間に切り刻まれて元の血に戻っていく。

私はチャクラを足にためて一気に跳躍した。

…霧の壁の上まで飛び上がった時……隠し持っていた折り紙で作りに出したいくつかの手裏剣取り出して狙いを定めた。

「『風遁・烈風掌』！！」

いつも操っている風に、さらにチャクラによる形質変化を加え、さらなる突風へと変化させた。

それに乗せるように手裏剣を投げる！

もちろん…軟体動物共にもあたったが、狙いの中！
ちゃんと書物だけでなくそれを持っているキャストにもあたった。
キャストの服が裂け…彼自身の血肉も飛ぶ。

「ひ…ひゃぎゃああ…!!」

キャストが痛みで悲鳴を上げるのを見ながら私は近くにあった別のビルの手すりに降りた。

…軽い舌打ちをする。

致命傷は…与えられなかったみたいだな…

だが…片腕は確実にとんだ。

えっと…左腕…かな？うん。左腕だ。

少し心臓の位置からずれたのが気に入らないな…もっと修行しないといと…

それに…せっかく切り刻んでやった書物も再生していくし…ったく…結局ダメージを与えられたのは左腕だけか…

「き…貴様…よくも…!!」

「いや…アンタが私を殺そうとしたからでしょうが…

だが……このままではアレだな……
今の私は七歳児……チャクラも当時の量に戻ってしまったている。
いや……私は基本的にチャクラ量は多い方だけど……でも、前世より少ないことは確かだ。
そのため、もうすぐそこを尽きようとしていた。

……まあ……相手にダメージを与えられたし、ここで撤退するのがいい。
完全に致命傷を与える術がない……ということではないが……どうせ……
……本当に致命傷を与えようとしたら、霊体化して避けるに決まっている。

となったら、チャクラゼロの私はおしまいだ。

「じゃあ、これでお開きにするか……!!」

そう叫ぶや否や、私はビルから落ちた。

もちろん軟体動物共は追ってくるけど……彼らにはさすがに羽は生えていない。

「『影分身の術』！！『変化』！！」

最後の力を振り絞って影分身で何体か分身を作りだし、一斉に『カラス』に変化した。

軟体動物共が地に落ちていくのを横目で見ながら、四方八方に飛び去っていく。

こうすることで、どれが私だか特定できるわけではない。

闇にまぎれて…しばらく見当違いの方向に飛んでいた私だったが、『探査』でつけてきている影がないのを確認すると、自宅に戻って影分身を全て解き…ベットに倒れ込むようにして眠りに引きずり込まれていった……………

11話 狂ったカエル（後書き）

凜の話はアニメ沿いに書きました。

12話 もう一つの聖杯問答 前編

「…ねえ、風香ちゃん…花里さんのこと聞いた？」

いつの間にか目の前に来ていた友人…早苗が尋ねてきた。それでようやく私は意識を現実に戻す。

「ん？…ああ…まあね。でも司法解剖つてのがあるみたいだから、通夜はもう少し先なんだってさ。」

「…そうなんだ……なんかさよく分からないけど…怖いよね…今日だって先生たちずっと会議してるし……」

「……まあ…でもさ、なんとかなるんじゃないの？」

それより…私はもう帰る。」

「え？」

疑問符を浮かべる早苗をよそに、ランドセルの中に教科書を詰め込む。

「んじゃあ、私帰るから。」

「なんでさっ？」

私が教室を出かかっていることに気が付いた土郎が驚きの声を上げる。

「だって…なんか朝からブーツとするし、どうせ次も会議つてのが長引いて自習でしょ？
ならいる意味ないじゃん。」

私はさっさと学校を出た。

ボー…っとするっていうより、朝からなんとなく具合が悪い。
まあ…ここ数日、急に立て続けに術を酷使したせいかもしれないな。
しかも…昨夜はチャクラ切れになったし…今は少しは回復して
るけど…でも、あまり術を使える身体ではない。変化の術だって
精一杯かもしれない…。

それにしても…呪印…か…

さっき早苗に話しかけられるまで考えていたことが脳裏によぎった。

昨日の狂ったカエル顔のキャスターって男は、『蛇のような男』の
仕事だって言っていた。

生憎と…思い浮かぶ人物はいない。

ユギトさんなら思い浮かぶかもしれないけど…

でも…なんでそんなことをしたんだろう？

なんで蛇男は…優実に呪印を？

死に至るような術をかけたのだろうか？

……もしかして…優実を殺したくて？

なら、もっと手っ取り早い方法があったはずだ。

……わざわざ生と引き換えに力を与えるような術をなんで植え付けたのだろつか……

そんなことを考えて歩いていると、気が付くと廃工場の前まで来ていた。

……不味いな……変化もしないで来ちゃった……

中にいるのは…ユギトさんの話だと赤い短髪の女性のみ……

倉庫街にいたメンバーにはいない人だけど、関係者…かもしれないしな……

てかさ、絶対に関係者だろ。万が一違ったとしても、絶対に一般人ではない。

だって……誰が好き好んでこんな所に住むの？昔さあ…優実と土郎と一緒に夜中こっそり入り込んで、肝試しをやったことあるけど…
…本当に幽霊でそうだったぞ！

ホコリっぽいし…暗いし……なんかガラスの破片とか落ちてたし…

……まさか、ユギトさんが見た人が、肝試しでここに来ていたとは到底思えないし……

「そこでなにをしておる。」

……………空耳かな？なんか物凄く聞き覚えのある声が背後からした
気が……………

「もう一度問うが……………一体ここで何をしておる？」

この時間帯は…子供は小学校とやらにいつているのではないのか？」

……………空耳……………じゃなさそうだな……………

でもさ……………逃げるチャクラもないし……………

恐る恐る振り返ると……………そこにいたのは……………自分を見下ろす大きな男の姿だった……………

「……………なんでさ？」

弟………土郎の口癖がポロリ………とこぼれた。

それは私だけでなく、私の隣で立っている気弱な少年……たしかウエイバーって言ったっけ？その人や、反対側にいる女の人……赤い短髪だから……たぶん、ユギトさんが見たって人と同じ人だと思う……もそう思っているに違いない。

……とりあえずは……この場合は『風香』のキャラで通すか……

「……っていつかさ、前にお母さんがお父さんに言っただけで、昼間っから酒を飲むのはいけないだつて。お花見とかは別みみたいだけ……」

「風香といったかのう？お前さんの母親はそう言っただけかもしれない。……世界のどこを探しても、そのような法はどこにもない。

まあ……存在していたとするならば、そんなふざけた法は余が潰すまでだかのう。

ほれ、固いこと言わずに酒を飲めぬのなら、そこにある『つまみ』でも食べよ。」

そう言っただけで地面に転がる柿ピーが入った袋の1つを私に投げるライダー……

「……でもさ……これ買ったのって……オジサンじゃないでしょ？この人でしょ？……たぶん……。」

そう言っただけでウエイバーの方をチラリ……と見る私……

だつてさ……ライダーって……そりゃ……超有名な英雄だけ……忍の世界で解釈すると『口寄せ動物』の一種みたいなものでしょ？この

世界の通貨なんて持ってないと思うし……

となると、彼がこの世界で生活していくために必要な資金を調達するのは……どう考えてもこの少年しかない……

「ガツハハツハツ！子供が細かいところを気にするものではないわ！！！」

「いや、ボクの財布のことは気にしてほしいよ……」

「だいたいさ……昨夜といい今日といい……なんでお前は警戒心つてのがないんだよ！！！」

ウェイバーが今にも泣きそうな声を上げた。

「その昨夜はさ、『王としての器』を図るために開いた酒宴だったんだろ？」

「でもさ……こいつら王じゃないじゃん！！！」

まず隣に立っている私を……次に反対側に立っている女性を……最後にライダーに向かい合う形で座っているランサーを指差して叫ぶウェイバー……。

「まったく……しかもこの子の言うとおり、こんな真昼間から……」
「やかましいわ！！！」

ライダーがウェイバーに向けてデコピンを繰り出す。
ばちいいんつという大きな音が響き渡った。

……痛みで額を押さえるウェイバー……

「昨夜は『王としての格』。そして今は『英霊同士の格』を競うために開いた酒宴ぞ。

聖杯は相応しきもの手に渡る定めであると聞く。」

さつきまでの騒がしかった男の雰囲気ライダーがガラリつと変わった。

敵かだけどこか静かな口調……先程までの緊張感とは違う緊張感がその場を支配する。

「それを見極めるための儀式が、この冬木の地における闘争だというが……

なにも見極めをつけるためだけなら、剣を交える必要はあるまい？
英霊同士……お互いの『格』に納得がいったのなら、それで答えはおのずと出る。」

そう言うと、ライダーは持ってきた樽の蓋を、己の手でたたき割った。

えっと……この臭いは……ワイン西洋酒……かな？

ライダーはその中に柄杓をぐいっと入れ……中の液体をすくう。
予想的中。やっぱり西洋酒だったみたい。

何するのかなーって見てたら、それを一気にあおったのだ。

……うーん……豪快だな……じゃなくて!!!

「それって…柄杓…だよ？コップじゃないよ？」

ツツコミを入れた時、ライダーは再び柄杓を樽に入れ中の液体をなみなみと注ぎ、ランサーに差し出していたところだった。

「なにい？違うのか？」

たしかにいささか奇妙じゃが…この国では由緒正しき酒器と聞いたぞ？」

「誰にだよ!？」

……柄杓って言うのは水をすくう為の道具であって、酒を飲むための器じゃない……って、本には書いてあったよ。

ってことだから、おねえさん！コップか何かある？」

「……………」

………うわぁ………ものすごく嫌そうな顔してる………

「ソラウ様、私がグラスを取って参ります。」

座していたランサーが立ち上がるうとしたとき、ソラウと呼ばれたあの女の表情がガラリと変わった。真っ赤になってランサーを制する。

「い…いいのよ、ランサー。貴方の手を借りる必要はないわ。私がすぐにとつて来るから。」

そついうとパタパタと奥へ走り去つていった……

「……あの小娘……新しい主人か？」
マスター

ライダーが尋ねる。

倉庫街で聞いた彼のマスターは男だったのに、それが変わつていたから驚いたのだろう。

私も驚いたよ。

あのナルシストなどつなつたんだ？

「……我が主の婚約者であり、代行の主だ。」
マスター
「代行？」

「…セイバーの主との戦いで我が主は致命傷を負つてしまわれたのでな。」

へえ…じゃあ、あの後、セイバーさんと戦つたんだ……つて思つていた時、ソラウつて人が帰つてきた。
2つ…グラスを持っている。

その片方をランサーの前に置いてから、次にライダーの前に置いた。

「ふむ…では、仕切り直しと行くのか。」

そう言つてライダーはランサーの前に置かれたグラスを手に取ると、先程と同じようになみなみと西洋酒を注ぎ、ランサーに渡す。

ランサーはそれを受け取ると、平然とした顔で一気におつた。

……うん……この人もライダーに負けなくらいの飲みっぷりだよ

……

すぐにお酒に酔う私の父親とは大違いだ。

「……なるほどな……それでわざわざ俺を訪ねてきた……ということか。」

だが解せぬな。何故ここが分かったのだ？」

「うむ。」

昨夜、セイバーのマスターの住まう城からの帰り道にな、この辺りからサーヴァントの気配を感じたから来たまでのことよ。

まあ、そんなに固くなるでない。これは『聖杯戦争』ならぬ『聖杯問答』よ。

果たして聖杯にふさわしきものは一体誰なのか…酒杯にとれば自然とつまびらかになるといふ寸法よ。」

またグラスに西洋酒を注ぎ、それを飲み干すライダー……

「だが、惜しかったのう……

ぬしを見つけるのがもう1日早かったら……ぬしもアーチャー秘蔵の酒を堪能できたというのに……」

「?アーチャーも参加していたのか?」

「うむ。町であつたのでな。声をかけてみたのじゃ。

いやあゝ…あれほどの酒は今までに飲んだことのないくらいの絶品
だつたのう……」

その味を思い出しているライダー……

あゝ……それに水を差すような気がしてならないけど……どうして
も気になることがあつたから私は口を開くことにした。

「……あのさ、それなら私はもう帰っていい……ですか?

聖杯戦争つてのとは全く関係ない一般人だし……」

「?関係あるのではないのか?

この場所には認識疎外の結界がかけられているのにもかかわらず、
ぬしはここをジィッと見ていたではないか?

それに……

実はぬしにそっくりな人物と以前、会つてのう……」

ライダーの目が光った。

……やばい…バレたかも……つてか、結界なんて貼つてあつたんだ

……

……つてことは、優実はその結界を越えた……つてことか……
呪印の力…かな?恐るべし……

「単刀直入に問うぞ。

ぬしは……『ネコアルク』か?」

……さて、どう答えようかな……

13話 もう一つの聖杯問答 後編 (前書き)

今回は前編通してウェイバー視点です。
次回からまた、風香視点に戻ります。

13話 もう一つの聖杯問答 後編

「『ネコアルク』？もちろん知ってるよ！！」

目の前にいる…以前、ケイネス先生を蹴り飛ばしたネコが化けていた少女にそっくりな少女…『フウカ』が無邪気に言った。

「えっ！？ってか知ってるの!？」

僕が驚いた顔をして彼女を見ると、彼女は笑顔を浮かべてうなずいた。

信じられない……だってサーヴァントとため張れるくらいの能力を
持っていたネコと知り合いのこの子…何者なんだ？

しかも、ココには認識疎外の結界が貼ってるのに、気が付いてなかつたみたいだし…

よく見たら、この子の目って…橙色？

魔眼の一種かもしれないけど……こんな色の魔眼なんて習ったことないぞ!？

「あのね、ネコアルクは、ファンタズムーンに出てくるマスコット

的感じのネコなの!!」

「……………はい?」

ふぁんたずむーん?
ますこつと?

「宇宙からやって来た『ネコ二十七キャット』の一角で、地球に何か目的があつてやって来たことは明らかなんだけど……………だって、壊れた宇宙船の中からネコアルクが出てきたんだよ?」
でも……………その目的って言うのがね、分からないの。
だってネコアルクは記憶をなくしちゃつてるんだもん!!

だから今はファンタズムーンの家とかカレイドルビーとかマジカルアンバーとかの家に居候しながら生活してるんだよ!!」

……………なんか目を輝かせて話すフウカって子……………

えつと……………つまりあれか?

「あのさ……………フウカ…ちゃん?

もしかして…ネコアルクってアニメのキャラなのか?」

「そうだよ!!」『白き月姫ファンタズムーン』のキャラ!!」

僕はガックシと肩を落とした。
なんだ……アニメのキャラかよ……

ん？じゃあ港の奴は……一体なんだったんだ？アニメのキャラがテレビから出てきたとは考えられないし……

「すまない、1つ訪ねてよいだろうか？」

今まで黙っていたランサーが口を開いた。
めっちゃくっちゃん真剣な顔してるよ……このイケメン……。

「つまりその『ネコアルク』という生物は現実には存在しない生物……なんだな？」

「うん。そうだよ！……だってアニメのキャラだし……」
「ふむう……アニメか……」

ライダーが唸るようにつばやいた。

「ところで、『あにめ』とはなんだ？」
「そこからかよ……！」

僕は思わずっこけそうになった。

そうか……聖杯は現代で必要とされる最低限の知識を与えるらしい。

……でも『アニメ』は最低限の知識から外れてるんだな。
聖杯戦争には十中八九関係ない知識だし！！

「えつと……ほら、ライダーも見たことあるだろ？
簡単に言つと、テレビで放送されている物語の一種だよ。

……ん？なんでランサーは『アニメ』を知ってるんだ？
ライダーと同じサーヴァントならアニメなんて単語知らないはずだ
ろ？」

まさか、ケイネス先生やランサーの新たなマスターになった先生の
婚約者がアニメを見るとは思えないし……

「確かにその『あにめ』というものは分からない。
だが、話の流れやライダーの主である君の反応から推測すると、『
ネコアルク』と俺たちが考えていたネコは現実世界には存在するわ
けがない生物だということが推測できる。」

渋い顔をして答えるランサー。

そこまで考えてたのか……少し感心してしまった。

「ふむう……となると別人か……
ちなみになんてお主はココに来たんじゃ？」

ライダーがフウカに尋ねると、フウカの顔色が曇った。

「友達の手がかりを探しに来たんだ。」

「手がかり？」

「うん。」

実は数日前に友達と一緒にね、『捜査』しようって話になったの。最近の誘拐殺人事件の犯人を情報を少しでも集めようって。だから一番怪しい雰囲気だしている『廃工場』に行こうって話になったの。

でもね……………」

フウカは個々で一回言葉を止めた。

そして…何か少し考え込んだ後…意を決したように口を開いたのだ。

「いきなり友達の身体に斑点が浮かんだって思ったら、悲鳴を上げて……………」

なんか角とか友達から生えてきて…………私を殴ってどっかいつちゃったの。

私は…気絶しちゃって…………気が付いたら家に運ばれたの。

でもその友達は…………友達は……………」

だんだん声が小さくなり下を向いたまま黙ってしまった。

「……………もしかすると……………」

ランサーが先生の婚約者の方をチラリ…とみた。
すると一気に顔を真っ赤にさせる婚約者……。

……どうやら……婚約者の人はランサーに惚れているみたいだ。

…あゝあ……もともとイケメンなのに、『魅了のホクロ』なんて持っているなんてずるいな……

僕なんかイケメンじゃないし、そんなホクロないから今までろくにモテたためしないし……

って、そんなこと考えている場合じゃなかった！！

「私とケイネス様がセイバーの所に行っていた時に、ソラウ様が見たという……人物が風香殿の友人なのではないでしょうか？」

「え……ええ……そうかもね……。」

絶対この人話が上の空だよ！！！！こういう状態を『恋する乙女』っていつのか？

「どんな感じでしたか！？」

優：私の友達は、どんな様子でどんな行動をしていましたか！？」

必死な感じで問いかけるフウカ。

と勝手に婚約者の顔が一変した。……いや、アレは元に戻ったって

いつのか？

「（なんで私がアンタみたいな子供に答えないといけないのよ……でも、ランサーが見てるし……）」

そうね……ハッキリ言うとは異形……だったわ。

いきなり叫び声をあげて襲い掛かってきて……でも、私はそこで気を失ってしまったの。目が覚めた時には誰もいなかったわ。」

「……………そうですか……………」

少ししゅん……となったフウカ……

「まあ陰鬱な話はここまでにして、そろそろ本題に入るぞ……！」

ライダーの陽気な声が、暗い感じの雰囲気壊す。

本題？……………ああそうか……………『聖杯問答』だっけ……………

「さて、ランサーよ。お主は一体聖杯に何を求めるのじゃ？」

「……………俺が聖杯に求めるものはない。」

俺の望みは……………マスターに尽し、聖杯を献上することだ。」

マスターに尽くす……か……………

でも、その話し方から察するに、今のマスターである先生の婚約者に尽くすって感じじゃなくて、ランサーを召喚した本来のマスターである先生に尽くすって感じかな？

「そうか……………そういえばだ。」

ランサーの話聞いていたライダーは、しばらくひげを触っていたが……………さも独り言と言わんばかりに話し始めた。

「そういえば、世界征服を企てる王がおつてな、その王は義に厚い中心となる騎士を探し求めているのだが……………いかせん。昨今の世には王の背に乗る夢みる若者が少なくてのう……………」

「……………それで？」

「だから腕が立ち義に篤く主のために槍を振るう無双の豪傑がいたとするなら、重宝したいと考えておつたのじゃが……………」

……………おいおい……………それってお前の話じゃないか！

お前がランサーをスカウトしたいって話じゃん！

つてかさ、さっきまでの話聞いてなかったのか？こいつに何言っても絶対にお前の下にはつかないつて。

……………つて……………この征服王ライダーに言っても無駄かもな……………

ランサーは少し口元を緩めた。

「……かの征服王直々の申し出はありがたい。誉れ高いことだ。だが、重ねて言うが俺の誓いは変わらない。俺が忠誠を尽くす人物はマスターただ一人。忠義を尽くす人物を見限るなど、それこそ不忠の騎士。」

「それでは俺の願いはかなえられん。」

「……あくまでケイネス先生に尽くすって事が……」

「ある意味凄いな……あの先生に尽くすなんて……あの傲慢ナルシストに……」

「いや……先生だからあまり悪く考えたらまずいけど。」

「チラリ……とランサーの今のマスター……の方を見ると、やっぱり面白くない顔をしていた。」

「ランサーは今のマスターを『マスターの婚約者』と見ているのだから……」

「忠義……か……」

「僕の隣に座っているフウカは、珍しいモノを見るようにランサーを見てつぶやいた。」

「そういえば……この子は女……だよな？」

「でもなんで……魅了のホクロにやられてないんだ？」

「もしかしたら類まれなる魔術の才能があるのかもしれないな。」

なんか羨ましい……って！僕だって才能の塊じゃないか！！
一体何を7歳児に嫉妬してるんだ！！

「ふむう……ならしかたあるまいのう。」

だが、余の門戸はいつでも開かれておる。それだけは覚えておくがよい。」

「ああ。その門をたたくということはありえないと思うが……
感謝するぞ、征服王。」

そう言っで一気にワインを飲み干すランサー。

「ところで……ライダーよ。お前は聖杯に何を望むのだ？やはり世界征服か？」

「いや……余が望むのは……いや、ココでは言うのはよしておこう。
ただ、世界征服をするために必要なものを手に入れるため……と
言っておこう。」

なんで『受肉』って言わなかったんだ？

僕がいぶかしげに見上げると、ライダーは片目でチラリッとフウカを見た。

……そうか……フウカがいるから当たり前か……聖杯戦争のことは
秘密だからだろうな。

って言っても一般人には到底思えないけど。

しばらくして僕たちは帰路についた。

ライダーと一緒に僕はマッケンジー家を目指す。

「でもさ、本当に『暗示』もかけなくてよかったのか？」

廃工場の前で別れたフウカを思い出す。

……そういえば、あの子に僕が買った柿ピーの半分以上の袋を持っていかれたんだよな……

「聖杯戦争の話など一般人にとって見たらおとぎ話のようなモノよ。親もだれも信じまい。」

それにあの子には対魔力が備わっているとみた。だから坊主の『暗示』程度では騙されんよ。」
「……………」

なんかカチンときたな…………

僕は言い返してやろうと口を開こうとしたその時、

「おー！アレはなんだ！？」

ライダーは、目の前をゆっくり通り過ぎる『焼き芋屋』を指差した。

………… あ………… やばい………… ライダーのスイッチが入ったみたいだ…………

ズカズカと焼き芋屋の方に近づいていくライダー。

「ふむう……………これはうまそうだ！これで買えるだけくれ！」

つて……………いったい何枚、札出してるんだよ！！

しかもそれ僕の財布だから！！

つて……………言ってもどうせ聞いてくれないんだろつな……………

ああ……………胃が痛い……………

「ほれ、1つ食わぬか？」

腕に抱えた大量の焼き芋の中から1つだけ僕に渡してくるライダー。
僕は黙って受け取った。

礼なんて言わないぞ。

だって、僕の金で買ったんだからな！！

そろそろ日が傾き始めたみたいだ。
うっすらと向こうの方が赤く染まっている。

「ん？この美味そうな匂いは……」

「カレーだよ！！カレー！！」

分かったなら行くぞ。」

「その飲食店から漂ってきておるが……どうだ、坊主？今から……」
「ダメだダメ！」

さつき焼き芋買ったばかりだろ？それに、もうすぐ夕飯じゃないか
！」

「む！そうであったな。

腹が埋まっていたら、せつかくの美味たる料理の味も半減してしま
うのう。」

「……………」

どうやら分かってくれた……みたいだな。

あゝあ……僕は生き残れるのかな？

いや！絶対に生き残れる！！

だって、僕は才能あふれる魔術師だし、召喚したサーヴァントは征服王だぞ！！

日常生活はアレだけど……でも！戦闘となるとものすごく頼りになる奴じゃないか！！

こいつを従えて僕は時計塔の奴らを見返してやるんだ！！

そう思うと心なしか胃の痛みが消えていったように思える。

僕は、まだ温かい焼き芋を食べた。

甘い芋の味が口の中いっぱいに広がっていった……。

14話 常に優雅であれ

「……やっぱり来たね。」

とんとん……っと軽く窓を叩くと、ガラリ……っと音を立てて開く雨戸……

「だって……なんというか……虫の知らせっていつのかな？
なんとなく胸騒ぎがして……」

「実は私もだ。入りな、フウ。」

ユギトさんが手招きした。そして、私が部屋に入ると窓を閉める。

……今日は朝から変な感じの日だった。

連日の北風が嘘のようにぱったりと止み、重くよどんだような空気を真夏もかくもやというほど強烈な日差しが、じつとりと蒸しあげて……そこらかしこに季節外れの陽炎を生んでいた。

しかも、この異常気象は冬木市を中心とするごくわずかな地域に限られたものだそうだ。

「なんというか……今夜あたり何か起こる気がして……」

ほら！あのキャスター……って人が怪物を召喚した事件から特に何も起こってないから……そろそろ何か起こりそうだなんて……」

「……そうだね。私も同じ意見さ。」

で……アンタは今……『本体』なのかい？」

自室の中にある簡易冷蔵庫の中からペットボトルを取り出すと、私に投げて渡すユギトさん。

私はそれをキャッチするとうなずいた。

「私の格好を見ればわかると思うけど……」

以前、キャスターと交戦した時と同じく野球帽の上からコートフードをかぶるといった格好の私。さらにマスクをすることで……余計に顔が分からなくなっていた。

「……今日は影分身に任せた方が良かったんじゃない？」

「偵察ならそうかもしれないけど……今日はなんとなく戦闘になりそうな気がしたから。」

「……このあいだみたくなりたくないし……」

「この間？……ああ……あの炎を使う魔術師との一戦か……」

口寄せ召喚して呼び出した忍猫の目を通してみた一戦を思い出すように、目を細めるユギトさん……

……あの時は本当に悔しかった……

……そう……それは今から3日前の夜……

家でゴロゴロと漫画を読んでいた時のこと……突如として異質な悪寒に、ざわざわっと見舞われたのだった。……嫌な予感がしたのでとっさに目をつぶって『探査』をしたところ……強力なチャクラ……いや、この場合で言うところ『魔力』になるのかもしれないが……を未遠川の方から感じたのだった。

そして……その『巨大な魔力の塊』にあつまる別の塊がチラホラ感じられた。

ああ……この感じはセイバーさん達だ……ライダー達にランサーだ。

……空にも大きな塊が感じられる……

…………気になる……でも、感情で行動して、倉庫街の二の舞にはなりたくないし……

……少し悩んだ拳句、結局……野次馬的な感情に負けて、影分身を送り出した。

影分身なので本格的な戦闘は出来ない。

だから……必然的に傍観者に徹することになる……はずだった。

影分身は最初はセイバーさん達の戦いを見ようと、霧がかかったようにハッキリと見る事が出来ない川に向かっていたのだが、その途中で見知った人物を目撃したのだった。

それは今にも死にかけの男……間桐雁夜……

高層マンションの屋上で、空に浮かぶ黄金のUFOみたいな乗り物をにらんでいる……

否。その乗り物に乗っている人物をにらんでいる。

私はそれを陰から見ていた。

夜霧に冷え切った大気の中を、船から舞い降りてきた紳士。……彼が完璧な垂直を保ったまま羽毛のように音も立てずに屋上に降り立ったことは、ある意味で賞賛に値するかもしれない。

でも、私は眉をひそめて見ていた。

さて……どうやら、紳士と雁夜さんは知り合いだったらしいが……
仲は良いとは言えないみたいだ。

常に優雅と余裕さをかもしだしている紳士……遠坂時臣なる人物……

対するは、その男に怒りを隠しきれない死にかけの男……間桐雁夜……

ちなみに、事前の『探査』でもう1人……自分とは反対側の位置に
一人の長い僧衣姿の男……敵か味方かは分からない。私と同じ『傍観
者』としてそこにいるのかもしれないな。

私は時臣なる人物と雁夜さんは、少し言葉を交わした後、2人の戦
闘が始まった。

雁夜さんが命令すると、大量の蟲が一斉に時臣という紳士に襲い掛
かっていく。

だが、相性が悪すぎたみたいだ。

時臣さんは大粒のルビーがはめ込まれた杖を優雅に振るう。すると、虚空に陣が現れ夜気を焦がして燃え上がった。

雁夜さんの蟲たちは唸り声をあげて、紳士が操る灼熱の炎に飛び込んでいく。

……飛んで火に入る夏の蟲……ってことわざがあるみたいに、敵うわけがない。

蟲が紳士にたどり着くことはなかった。

それでも攻撃を続けていく雁夜……が、その戦意だけでは何ともならない。

とうとう彼は、紳士にダメージを負わせられないまま…倒れ込んでしまった。

全身の毛細血管はいたるところから血を吹き出し、見るに堪えない無残な姿になっていた。

それでも、蟲を使役しようとする。

「Intensive（我が敵の火葬は） Einasacher
ung（苛烈なるべし）ー」

術を唱えると紳士を防御していた炎の陣が、みるみる間に蛇のように唸り、雁夜さんに襲い掛かっていく。

……ここが私の限界だった……

「『水遁・水陣壁』！』」

雁夜さんの前に、垂直な水の壁が出来、灼熱の蛇は白い煙となって消滅した。

雁夜さんも時臣という紳士も驚いたように目を開いている。

「……あゝあ……また首ツツコンじゃったよ……」

雁夜さんと時臣の間に私は立った。

「君は……あの時の……」

その時の私の格好は、あの時…キャスター交戦時と同じ格好の上に……正体がばれない様に、有名なアニメに登場する電気ネズミのお面をかぶっていた。

「……凜って子は…あの後どうした？」

「……凜ちゃん…は…葵さん…彼女の母親に…渡したけど……」

「……そうか…ありがと。」

「……どうやら君は凜を知っているようだが…何者だ？」

警戒心を強めた様子の時臣……。

「通りすがりのお節介…ってとこかな。」

ちよいつとアンタの考えが気に入らなくてね……

その『常に優雅』みたいな思想……この戦場では捨てた方がいい。」

「何故かね？」

『遠坂の魔術師たる者、常に優雅であれ』これが家訓なのだが……

私の方も君が気に入らないね。

人の戦いに横槍を入れるとは……」

けがらわしいモノを見るかのような目付きで、私と雁夜さんを見てくる。

「水の属性の魔術……もしかして君の娘かね、雁夜？」

間桐家は代々『水』の属性だからな。

…君は魔術師の家を継ぐ運命から逃げ出した脱吾者であるとおもっていたが……君より『優秀』な魔術師ではないか。」
「…いや、この人とは血の繋がらないよ。
言っただろ？通りすがりのお節介だつて。

……さて……と。んじゃあ行きますか。」

仮面をしているし、声もヘリウムとかいうガスを使って変えてある。

バレる心配はない。

「私が時間を稼ぐんで、雁夜さんは逃げてください」

「なっ！？何を……」

「…この間…凜って子を説明なしで託してしまった礼。」

あなたの今の状態で戦えるとは思えないし……それにさ、さっきの話を聞いてて思ったんだけど……

まだここで死ぬわけにはいかないんじゃない？

その『桜』って子のためにも……」

『桜』と聞いたとき…目の色が変わった雁夜。

時臣って人に向けていた『復讐』『憎悪』の色から別の色……『人を助けたい』『生きなくてはいけない』という感じの色に変わっていく……

一方の時臣は、わずかに困惑の表情を浮かべていた。

「『桜』のため？一体何を言っているのかね？」

「私には魔術師の家の事情なんて分からない……でも、人を…自分の子供を『根源の渦』つてのに至るための『道具』のように思っているアンタには分からないよ。」

「…君も魔術師なら『根源の渦』を指さしていないのか？」

「だから……」

私は魔術師じゃなくて、ただの通りすがりのお節介だつての……！！！！」

印を結ぶ私。思いつきり口を膨らませた。

「『水遁・大砲弾』……！！！！」

口から圧縮した水の塊を放出する。

とつさの攻撃に、少したじろぐが、すぐに防御の陣を作り出す時臣。

炎の陣に高密度に圧縮された水の塊が当たって、白い水蒸気があたりを包み込んだ。

だが、慌てずにその場に優雅にたたずむ時臣……だったか……

「……この音は……！？」

ぶふううんつという蟲の羽音が聞こえ、慌てて視界が開けている後ろ振り返る。すると漆黒の夜空のかなたから蟲の大群が時臣に襲い

掛かるうとしているところだった。

内心あわてて……しかし優雅に杖を振り、灼熱に舞う炎で蟲を焼き尽くす時臣。

「そう……だから『優雅』は戦場では通じない。」
「!?!」

時すでに遅し。

私は時臣が後ろの蟲の大群に気を取られている隙に、足にチャクラをため、時臣に急接近をした。そして思いつき蹴りを放つ。

防御も何もしていなかった時臣の身体は屋上の端まで吹っ飛び、フエンスに激突した。

「戦場では予想だにできなかったことが起こるモノ……だから『優雅』になんて対処できないのさ。」

……私自身……この展開は賭けみたいなものだった。

きっかけはユギトさんが、使役には向いていない、気ままに行動をする『忍猫』となんで『口寄せの契約』を結んでいるのか……ってことだった。

その理由は…前世では封印されていた尾獣のチャクラ…今は体内に残る尾獣の残留チャクラにあった。

…彼女は二尾…つまり猫又を封印されていたのだ。

だからその猫又の残留チャクラを使い、猫又より格の低いネコを使役できていたみたいなのだ。

だから…その応用で七尾…つまり蟲の化け物の残留チャクラを持つ私は蟲を使役できるのでは？…と思ひ、雁夜さんの蟲を使わせてもらった…結果は成功。

蟲は思う通りに動いてくれ、時臣への不意打ちへつなぐ手になってくれた。

…だからってあまり多用する気にはなれないが…あの虫は気持ち悪いし…

「…!」

その時、大気の乱れを感じた。
あわてて防御の構えを取る……が、その攻撃を防ぐことは出来なかった。

「……で、その聖職者っぽい人の強烈な拳を受けて、影分身は消えた……んだっけ？」

「そう。」

「……あのまま行けば、雁夜さんは死ななくて済んだかもしれないのに……」

そこで消えた私には分からないが、ユギトさんの忍猫を通じてみた様子だと……雁夜さんは、立ち上がった時臣が作り出した灼熱の蛇に攻撃され……呪祖を吐きながら……燃えながら……屋上から転落していったのだとか……

「死体を見つけられなかったから、生死は不明だけど……難しいだろうね……」

つぶやくユギトさん……。

もし……あそこにいたのが影分身ではなく『私本体』だったら……もう少し戦えて……雁夜さんは死ななくて済んだかもしれないのに……

だから、影分身は『傍観用』なのだ。本格的な戦闘を考えるなら……
『本体』が出ないと後悔することになる。

「……まあ……良かったんじゃないか？影分身だったから、今のフウは生きているのかもしれないし……
……ん？」

窓の方を見たユギトさんの目が細められた。
私も見てみると……

ずっと向こうの方……新都の……私の家がある方向から、チカチカ光る花火のようなモノがあがっていた。……だが、こんな深夜に花火なんて打ち上げる奴はいない。
……狼煙の類のように思えた。

「アレは……」
「……おそらく……今建設中の公民館……みたいだね。」

目をつぶってその近辺に待機させている忍猫と視覚をつなぐユギトさん。

「公民館……の奥に……人がいる……何か儀式をするみたいだな……
この間の聖職者と……雁夜さん!!?」
「えっ……?」

生きてた……ってか、なんであの男といえるの？

「なんで……敵だと思ってたけど……」
「分からない。」

フウ……私も今回はいくよ。」

ジャンパーを羽織るユギトさん。いつになく真剣な感じの目をして
いた。

そう……まるで死地に向かう忍のような……って……彼女も忍か。

私とユギトさんは部屋を出て、薄ら寒い夜の街に降りた。

外は夜間外出禁止令が出ているので、人っ子一人いない……シー
ンとしていて……まるでゴーストタウン……

「ついてきな、フウ!!」
「はい!!」

ユギトさんの後を追い、チャクラを足にためて屋根に跳躍する私。

タツタツタつと音を立てて夜の街の屋根の上を走っていく。

…ユギトさんの家は深山町……だけど、狼煙つばい花火が上がったのは私の家がある新都…

脳裏に両親や士郎…近所の友達の顔が浮かぶ…

なにもないといんだけど…

「止まれ、フウ。」

静かにそう告げて止まるユギトさん。

慌てて私も止まると…

「誰…?」

私達の前に立ちふさがるように、4人の人影が立っていた。

15話 四人衆襲来！（前書き）

今回の視点は、「風香
順で進んでいきます。

ユギト

多由也

ユギト」の

15話 四人衆襲来!

月明かりを背に立ちふさがるは四人の人影………つてか………

2人、確実に人間っぽくない人がいる!!!

なんか1人は手と足が合わせて8本あるし、頭が2つある人もいる。

なんなんだよ、こいつら!!!

「我らは四人衆… 『東門の鬼道丸』!」

8本手足の人が名乗りを上げる。

「同じく『西門の左近』」

「同じく『南門の次郎坊』」

「『北門の多由也』」

上から『頭2つの人』『太っている人』『女の人』が口々に名乗りを上げていく………。

それを聞いたユギトさんは少し興味深いモノを見るような表情になった。

「ほう……噂には聞いたことがあったけど……
なるほどね……フウ、どうやら転生者は私達だけじゃないみたいだ。」

「えっ……じゃあ……あの人も忍者？」

「そう、『音隠れの忍』。」

「アンタは知ってるか知らないか分からないけど、彼らは大蛇丸つて
忍者のお抱えの結界担当忍者だったってところかな。」

「4人一組の連携技は、上忍クラスでも手を焼くレベルで、噂だと……
木の葉崩しの時にも暗躍していたとか……」

「木の葉崩し……って……」

「確か『木の葉隠れの里』で開かれていた中忍試験の際に『砂隠れの
里』が起こしたクーデターのなものだと聞いたことがあったけど……
まさか『音隠れ』が絡んでたなんて……」

「……フウ……先に行きな。」

「えっ……でも、そうしたらユギトさんが4人を相手にすることに

……」

「いいから行きなっって言っただよー!!」

物凄い剣幕で叫ぶユギトさん。

それに押し出されるように私は走り出した。

「ここから先にはいかせ……ぐふあー!!」

頭が二つある人…たしか左近とかいってたっけ？が私の前に立ちふさがったけど、一瞬でどっかに吹っ飛んでしまった。なんだか分からないけど……たぶん、ユギトさんが何かしたんだろう。

振り返ろうか…っと一瞬思ったが、そのまま走り続けた。たぶん…振り返ったらまたユギトさんに怒鳴られそうだし……

「……無事でいるよ……」

私は出来る限り精いっぱいチャクラを足に集めて…屋根を蹴った。

「さてと……ここから先にはいかせないよ。」

左近を蹴り飛ばした私は不敵な笑みを浮かべる。

音隠れ出身の転生者ってことは……どうやら全員あの蛇男の部下みたいだから『呪印』があるに違いない。ってなったら……

呪印が出る前に倒せばいいだけだ。

さて…どうやるか……

「!?!?」

その時、私を囲むように現れた土の壁。

気が付いたときには時すでに遅し。私はすっかり土の牢の中に閉じ込められてしまった。

……なるほどね……

私はウエストポーチの中から『あるモノ』を取り出すと、土の壁にソレを当てる。

さてと………始めますか………

「……んじゃあこは任せたぞ、デブヤロウ。」
「……多由也……お前口悪いぞ……」

ウチ……多由也とその一行はあの女の相手を次郎坊あしでまといに任せて、逃げた小娘を追うことにした。

……まったく……元の世界であの女に殺されて……この世界で転生しても『大蛇丸様』に仕えられるとは思っていなかったぜ……
しかも、またこのメンバーと一緒に行動するとはな……

運命とか絆とかそういうものなのか？

……馬鹿馬鹿しい……そんなくだらないことあるわけない。

きつと、偶然だ偶然。

「にしても、大蛇丸様も面白れえゲームを用意してくれたものだけ
よ。」

手だか足だかしらねーけど、とにかく手足が八本あるクモ男…鬼道丸がニヤニヤしながら言う。

「これはゲームじゃないんだぞ。ま…ゲームみたいな余興かもしれないけどな。」

左近がくつくくと笑う。まあ、それには賛成だな。大蛇丸様の今後の展望みたいなのをチラツと伺った感じだと、次郎坊が『チャクラを吸い取る土の壁』（…術の名前は忘れた）に閉じ込められている女と、今ウチ達が追っている小娘を捕え仮死状態に追い込むのは『余興』みたいな感じに聞こえたしな。

「っちよつと！！追ってこないでよ！！このストーカー共！！！」

チラツと小娘は振り返って吠える。

ウチ等だって追いたくて追いかけてるわけじゃないんだっての！！分かれよ、そんならい！！

「あゝもう！！邪魔だな！！！」

小娘は完全に立ち止まるとクナイ…じゃなくて、ナイフをこちらに投げてきた。

だが、へなちよこ攻撃だったので交わすのは、ちよろいもんだった。

「あゝもう……そのオバサンを殺そうとしたのに…避けんじやないっての。」

「ああん？誰がオバサンだつて？」

「えゝ？分からないの？アンタに決まってるじゃん！！」

ぷっちーん

ウチの中で何かがキレる音がした。

「まだ転生してから15年しかたつてねえんだよ！！
鬼道丸！左近！！ここはウチがやる！手出しすんじやねえぞ！！」

そう言うと、2人の返事なんて待たずに指を軽く噛む。

そして血がにじんだ状態ですばやく印を結んだ。

「後悔すんなよな…『口寄せの術』！！！！」

『口寄せの術』で三体の『怒鬼』を召喚する。

そして、構えていた笛を口にくわえると……戦いを終焉に誘つ曲…
『魔鏡の乱』を奏で始める。

すると、三体の鬼の内が一斉にパツクリつと開き、口の中から各々の魂みたいなモンが、ろくろ首みたいな感じで出てくる。

……鬼たちはウチの笛の音色に従い…小娘に襲い掛かっていく。

「・・・!?」

……鬼たちに攻撃されてやっぱりあの小娘は驚いているみたいだな

……

この鬼たちは身体エネルギーを求めてチャクラを喰らう……

元々あの小娘はチャクラコントロールが苦手そうだからな。
ちよろいもんだぜ。

一気に終幕を……

「!?!」

その時だった。

心臓に鋭い痛みが走る。

そこを触れてみると……暖かいぬめり……

「うはめ」

口から何か鉄の味をした液体が飛び出てきた。

……まさか！っと思ひ、恐る恐る手を……己の鮮血で真っ赤に染まった手を見る。

もう一度…確認のために心臓の場所を触ってみると……そこには何もなかった。

……心臓があつた場所に穴が開いていた以外は……

混じりけのない深紅の色で染まった己の手を見ながら、地に倒れるウチ。

激痛の中で一体何が起こつたのか……理解することなく意識が漆黒の闇に持っていかれた……

「……………これで最後……か。」

私……ユギトはふう……っと肩を落とした。

彼女の足元には、まだ生暖かい……頭と胴体が分かれたクモ人間……鬼道丸の骸が横たわっていた。

……フウから『蛇のような男が呪印を友人につけたらしい』と聞いたとき……思い当たった人物は、木の葉の里の抜け忍で、音隠れの里の創始者でもある『伝説の三忍』の1人……『大蛇丸』だった。

……直接対峙したことはないが、その評判は耳に入ってきている。

万が一…彼の仕業だとしたら………こちらもそれ相当の準備をしなければならぬ。

っということ、事前に自宅の一带に札を使って結界のようなものを張ったのだ。

とはいえ、これから何が起こるか分からないので、チャクラの浪費は避けたい……

なので、結界を発動させたのは、太った忍び…次郎坊の作り出した土の牢獄から脱出した後だった。

技術的に『土』の属性の術だったので、『土』より強い『雷』の属性のチャクラ……に似たスタンガンの電気を流し込むことで、術を無効化し……思いつきり拳を放った。

するとあっけなく土は崩れ、驚いた表情の次郎坊を見た時に、印を結び結界を発動させた。

……この結界は優れもので多少チャクラを食うが……相手に思い通りの幻術を見せられるのだ。

……この4人にはそれぞれ……次郎坊のみ相手は私だが、それ以外の相手はフウという設定の幻術を見させた。

まず、次郎坊が私だと思って左近に攻撃し……左近がフウだと思って

次郎坊を殺す。

その左近に攻撃するのが4人衆の紅一点である多由也だ。

…そしてかなめになったのが、今足元に転がる鬼道丸…

彼には早々に呪印解放をしてもらい、口から紡ぎだす矢でフウと私だと勘違いしたまま、左近と多由也の心臓を射殺してもらった。

そして『ゲームに勝ったぜよ……まったく…イージーすぎたぜよ。』
とか言っている間に、私がスタンガンで後ろから攻撃した後……M
Y包丁で胴体と頭を切り離れたのだった。

「…さすが雲隠れの『二位ユギト』……いや…今は『海原柚木』と
言ったほうがいいのかしら？」

後ろからオカマのような声がかかる。

ゆっくり振り返るとそこにいたのは……前世でビンゴブックを読ん
だ時に見た男……

自然と眉間にしわが寄ったのが分かった。

「……そうか……お前が大蛇丸……か……」

「そうよ。さてと……アナタの出番はもう少し後なのよ……だから
ここでは一時退場してもらおうわ。」

怪しげな笑みを浮かべる大蛇丸……
私はゴクリ……と唾を飲みこむとキツツと大蛇丸をにらんだ。

「退場？…悪いが…まだ死ぬわけにはいかないのさ

……雲隠れの『二位ユギト』…今生の名を『海原柚木』の名にかけ
て……ここでお前を倒す！！」

冷たい夜風が頬を貫くように通り過ぎていく。

久々に感じる『本物の殺気』にゾクゾクつとしたが、何とか踏みとどまり……私は走りながら印を結んだのだった。

16話 2体の暴君（前書き）

今回から形式を少し変えました。

16話 2体の暴君

川を吹き渡る冷たい風……

冬木市を2つに分ける未遠川にかかる真っ赤な橋……冬木大橋……

…その橋の上に2つの人影があつた。

1人は、先程まで橋の上に存在していた大男を斬つた黄金の鎧を纏つた世界最古の王……英雄王・ギルガメッシュ。

彼の残忍な赤い双眸は、まっすぐ目の前にいる小さな男を見据えたまま歩み寄っていった。

先程までここに存在していた大男の主人……いや、臣下だつた男……
ウェイバーは、恐怖で目をそらしそうになつたが、なんとか踏ん張り、目をそむけない。

ウェイバーはもう、聖杯戦争に参加するマスターではない。
ただ…1人の魔術師であり……征服王イスカンダルの臣下だつた。

ウェイバーは恐怖で喉が凍えながらも、不思議と口から出る言葉は静かなものだつた。

「…だが、小僧。」

真に忠臣であるならば、亡き王の敵を討つ義務があるはずだが？」

呼吸するのも同然のように、殺気を放つギルガメッシュ。

だが、その殺気の中でも不思議とウェイバーから出る声は、静かなものだった。

「オマエに挑めば僕は死ぬ」

「当然だな」

「それは出来ない。僕は『生きる』と命じられた。」

身を守るすべもない少年……ただ死を待つだけの少年は、震えながら眼差しだけで不屈を訴えていた。

その小さすぎる背を、ギルガメッシュはしばしの間無言で見下ろす

……

が、やがて小さく一度うなずいた後……口を開いた。

「忠義、大義である。努々その在り方を損なうな。」

聖杯戦争に参加するマスターでもなければ、自分に刃向うわけでもない雑種とあっては、王が手を下す必要がない。

彼に背を向けギルガメッシュは去っていく……

……はずだった。

ズツシャアアアアン！！！！！！

立ち去ろうとしたギルガメッシュの側に落ちてきた謎の人物。

……いや、人物と言えるのだろうか……

その人物の肌は褐色で……白く変形したらしきもの骨が、体中のいたるところから肌を突き破ってむき出しになっていて……しっぽまで生えていた。

どうやら吐血をしたみたいで、口から血をにじましている……

はあ……はあ……っと荒い息をしながら、彼が墜落したときに出来たクレーターの中から立ち上がる人物……

ギルガメッシュは、自分のすぐそばに落ちたその男をジロリ……っと汚らしいモノを見るような目つきでにらむ。

すると、その人物もその視線に気が付いたのか、黄金の王を見上げた。

「……ギルガメツシュ……か？」

「ほう……雑種よ……なぜ我^{オレ}の真名が分かった？」

「……大蛇丸様から聞いた。この時刻に橋にいる黄金のサーヴァントはお前だと……な。」

「……あの蛇男の部下か……」

ますます汚らわしいモノを見たかのような目付きになるギルガメツシュ……再びその口を開こうとしたその時！！

「グオオオオオン！！！！！」

咆哮が川に木霊する。

見上げてみると、橋に絡みつくように九つの頭を持った龍が3人を見下ろしていた。

「……ほう……2人増えているではないか……」

まあいい……吾輩への供物にするまでよ。」

「く……供物って……？」

その時、ウェイバーは龍の上に小さな人影が乗っているのに気が付いた。

否…しがみついている…といったほうがいいのだろうか？
小さな小さな人影…そう…それは…

「って…フウカちゃん!？」

彼が思わずつぶやいた言葉は、龍の耳に入ったようだ。
9つのうち、1つの頭がウェイバーの方を向いた。

「ほう…アレは風香の知り合いか？
またまた弱そうな面の人間であることよ。…つまりなそうだな。」

(うう…なんでこんなことに…)

もう龍…九頭龍にしがみついているだけで精一杯な風香は、心の中でため息をついた。

そう…それはほんの数十分…いや、もしかしたら数分前のこと
かもしれない…

とにかく時をさかのぼる…

ユギトに後を任せ川の向こうの新都を目指す風香……だったが、あと少しで未遠川……っというところで、前に一人の優男が立っているのに気が付いた。

ちなみに風香が駆けているのは屋根の上……しかも深夜二時過ぎ……こんな時刻にこんな場所で……しかも風香を待ち構えていたかのように立っている男……

明らかに一般人ではない。

だが、それに構わず風香が通り過ぎようとすると……

「!」

何か白く尖ったもので風香に攻撃をしてきた男。
風香は飛びのくと、男から距離を置いて立ち止った。

「……………骨?」

そう……男が使っていたのは『骨』だった。

夜の闇の中で、余計にその白さが際立っていた。

「あの……その……骨使いさん？なんでここを通してくれないんだ？」

「……大蛇丸様の命だからだ。」

新都へ立ち入ろうとするイレギュラーは排除しろ……とな。」

「イレギュラー……だと？」

「どういうことだ……！」

「お前には関係ないことだ。」

とにかくここから先へは通さない……君麻呂の名にかけても……」

「……なんのことだかよく分からないけど……」

生憎と新都にどうしても戻らないといけななんだ。カづくでも……通るまでだ……！」

屋根を一気に蹴ると、まっすぐに走り出す風香。

君麻呂はただ立ってジィッと風香を見ていた。

そして、あと一步で君麻呂の攻撃範囲に入る距離に入ると、さらに足にチャクラを集めて速度を加速。一気にそばを通り抜けよう……！
つとしたが……

「……無駄な事を……」

バシィッと風香の身体を骨で一刀両断する君麻呂……だったが……

ばしゃっ

っと冷たいモノが全身にかかった。

君麻呂が攻撃した風香は『水分身』。

攻撃したことで消滅した分身は、水に戻り君麻呂を濡らす。

「物質としての水は雷に弱いんだよな!!」

隠れていた風香がユギトから貰ったスタンガンを取り出し、君麻呂の身体に当てる。

「っ!」

少し辛そうな顔をする君麻呂……だったか……

ガシッとスタンガンによる電撃を浴びながらも、しっかり風香の腕をつかむ君麻呂。

徐々に彼の身体に黒い文様が現れたかと思うと……彼の身体から皮膚を破って骨が抜き出てきた。

それが風香の腕を貫通する。

「うっ！！」

痛みで思わず目をつぶり、持っていたスタンガンを落とす風香。君麻呂は貫通させた骨を抜き…そのままよろけた風香に対してさず攻撃を仕掛ける君麻呂。君麻呂が鋭く尖った骨をむき出しにした状態で回転することで、風香の身体が蜂の巣にちかじょうたいになる。

「……………はあ…はあ……………」

なんとか君麻呂から再度距離を取る風香。額から出た血を袖で乱暴にぬぐう。が、流れ出てくる血のせいで視界が悪くなる。

「…つくそお……………」

あと少しで川にたどり着くというのに……………悔しい気持ちでいっぱいになる風香。

身体で体感して分かったことだが、あの骨の硬度は鉄…いや、下手するとそれ以上かもしれない。

現段階で風遁でパワーアップした風の力を使えば何とかなるかもし

れないが……

「十指穿弾!!」

君麻呂の指から弾丸のように骨が放たれる。

あわてて風のシールドを張る風香。

際限もなく降り注がれる骨弾の雨をシールドで防ぎながら対抗策を
考えていると、ふと、あることに気が付いた。

風のシールドが…徐々に削られていつていることに……

シールドにぶつかった骨弾は、粉状に粉碎されてしまっているのだ
が。徐々に…確実にシールドを削っていた。

「ヤバい!!」

シールドを解くのと同時に跳躍する。

「『水遁・水龍鞭』!!!」

地面に着地する前に、水で鞭を作ると、君麻呂目がけて変則的かつ

高速でとばす。

が……

「椿の舞」

高速で迫りくる水の鞭を、眼にもとまらぬ速さで乱れ突きする君麻呂。

……『水』というのは柔らかくすぐに壊れるイメージがあるが、風香が作り出した水の鞭は、チャクラで強化させてある。それなりの硬度はあるのにとっても簡単に形を崩されてしまっていた。

「これでおわりか？」

冷やかな声を通る。
風香は奥歯を噛んだ。

……もう……ここまで来たら『奥の手』を出すしかない……
腹をくくり指を噛む風香。

つうーっと血がしたたり落ちた。

「とっておきを見せてやる!!」

なにせコントロールしこなす前に死んだから……どうなるか分からないけどね!!」

そう……

任務が終わり帰里する際に、迷い込んだ秘境……そこで自分の手には余る生物と交わした契約……

「『口寄せの術』!!!」

白い煙と共に姿を現したのは……

「……なんだここは？」

それよりも……ずいぶんと縮んだではないか…風香よ。」

煙の中から現れたのは巨大な九つの頭を持つ龍……『九頭龍』。

消費したチャクラの量は尋常ではなく、風香はもう立つことすらままならなかった。

本当は別の……もっと自分の言うことを聞いてくれる『白龍』や『黄龍』を召喚しようとしたのに………よりもよって『暴君』といわれるような龍を召喚してしまったので、さぁーっつと血が引いてい

く風香…。

「さて……お前に昔告げたことを忘れたとは言わせないぞ。吾輩を召喚するときには……それ相当の供物を用意しろと……申したはずだが……」

「え……ええつと……」

まさか無いとはいえない風香……

『供物』を探す九頭龍の黄色く光る目が、君麻呂を捕えた。

「……ほう……そうか。あの人間が『供物』か……
骨を操るところから察するに……まさか『かぐや一族』の生き残りとは……」

面白い。存分にあの『供物』で楽しませてもらうことにしよう。」

「そう……そう……アレが供物だから……！
んじゃあ私は先を急ぐから、ここはよろし……うわあ……！」

ふらついた足取りで新都に向かおうとする風香だったが……、龍の手が風香のフードを掴むと、ひょいっと背に乗つけたのだ。

「どこへ行くのだ？」

せつかく吾輩を呼びだしたというのに……このまま吾輩の勇姿を見ぬまま立ち去ろうなど……考えているわけではあるまいな？」

「……………」

九つの口が君麻呂に向けてぐわあっつと開く。

前世の絶頂期（つまり契約を交わしたての頃）ならなんとかこの龍の言い分に逆らうことが出来たかもしれないが……………はつきりいつてこの『暴君』を屈服させる量のチャクラが不足している今の風香は、かじかむ手で背にしがみついて見ていることしかできなかった。

16話 2体の暴君（後書き）

…えつと……

これから間近に迫った試験対策で忙しくなるので、次の更新は1月の15日以降になります。

その日：もしくはその次の日には絶対に更新するので、見捨てないでください……

今年もよろしくお願ひします!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1415z/>

風が紡ぐ聖杯戦争

2012年1月2日00時47分発行